

324
3

通如正入

324-3



如
上
人

明治
39 5 21
内交

序

今茲に印行する所の『蓮如上人』は先般教界時事社の依頼に應じて談話した所の筆記を集めたものである。蓮如上人は日本の宗教史中、重要な位置を占めて居らるゝ人で、今日之を研究するのは、頗る必要なる事である。然るに古來上人に關する詳細で確實なる傳記は殆んど無いといふてもよい。蓮如上人の道德記といふ書があるが史實は比較的に確かであるけれども極めて簡略である。又上人の一期記といふ書もある、これは稍々詳細であるかはりに確實と云ふ點は如何であらうかと思はれる次第で上人の史實を研究するには極めて好材料に乏しいのであるが、然し此外に上人の御一代聞書、山科連

署記、反古裏書、及實悟記等の書が有て、上人の性格、行狀等を伺ふに足るべき條項が、澤山記載してあるから、綿密に此等の書をしらぶれば不完全乍らも上人の幾分を研究し得る事も出来やう、併し余は之れをすら一々搜索し研究する暇が無かつたのである、唯座右に在つた極めて淺薄なる一二の書物を材料とし、それに自身の考を幾分加えて談したに過ぎぬ、云はゞ眞面目に學問的に蓮如上人を研究して談したのでは無い、されば余が此の談話は歴史の側から見る時は些かの價値も無いものである、それも初めから終りまで一時に談話をし筆記をさしたるものならば幾分主意も連續し、思想も一貫するわけであるけれども、十日に一回、一月に一回といふやうに

間を距て、談したのであるから主意も思想も前後連續せず、終始相應じて居らぬ所も甚だ多い、元より一冊の書としてまとめるといふ考も無かつたのであるが此度井冽堂よりの依頼で拒みがたき事情に立到つたので餘儀なく、之に應じた次第である、蓮如上人の史實を研究するも唯爲めでは無く、唯修養の一端に資する目的を以て讀むべき事を望む、因みに蓮如上人について讀者諸君は告をおきたい事がある、
上人は表面より之を望めば、極めて穩和な御方の様に見ゆるけれども、一度上人の奥心に立入つて見れば堅忍にして抜くべからざる氣象、獨立拘はらざるの精神、その他敏捷圓滑なる

才智、強健鐵の如き意志が蜜の如き慈愛溫和の裡に包まれて
あるのである、此の事は尙ほ、本書を讀むで味はつて見られ
たならば自らわかるであらう、余は將來日本の國民も此蓮如
上人の如くあつたならば何事に就ても競争に敗を取る事無く
増々國運を發展せしむる事が出来るであらうと思ふ、是れは
たゞ蓮如上人のみで無く親鸞聖人も亦此特性を具へて居られ
た、思ふに是れは眞宗の教義が斯く成らしむるのである、眞
宗の教義は表面慈悲門であるから頗る穩和的ではあるが、然
し其慈悲は決して單純な慈悲では無い、即ち知識も意志もそ
の中に備はり忍耐も勇氣も十分含まれたる慈悲である、親鸞
聖人や蓮如上人は深く此の教義を信ぜられたる處から此等の

功德を身の上に實現なされた人である、されば眞宗教義を眞
面目に信奉する人ならば又必ず親鸞蓮如兩上人の如き立派な
る性格が其所から顯はれねばならぬ、若し教導者其人を得ば
眞宗の教義は今日の世に處すべき活動進取的の國民を養成す
るには最も適して居る宗教であるのである、世の人は日本佛
教と云へば何れも皆無常一方を説き人心を柔弱ならしむる宗
教であると思ふて居るやうであるが、一面には其弊も慥かに
ありもしやうが、然しそれは決して日本佛教の真相では無い、
親鸞聖人や蓮如上人の言行を見れば其邊の事が明かである、
日蓮上人の如きは、勇敢なる意志の方面を表に顯はして居ら
るゝが、其裏面には又頗る穩和なる慈悲を含むて居られた、

親鸞聖人や蓮如上人は其れと異り、穩和の徳を表せられて居るが内には日蓮上人も一步を譲る様な勇強なる意志をつゝむで居られたのである、表面から見れば、日蓮と親鸞蓮如とは正反對の様ではあるが、表裏透徹して見來れば兩者相一致すべきものである、余は特に是等の點を説き顯したいと思ふたのであるが、前にも云ふ如く時日を距て、胸に浮ぶまゝを斷片的に述べたのであるから上人の性格を十分に發揮するを得なかつたのは甚だ遺憾とする所である、

明治三十九年四月

前田 慧 雲 誌

蓮如上人

目 次

第一章 蓮如上人以前の眞宗……………一

第二章 上人の誕生……………八

第三章 上人の立志……………一六

第四章 上人の修學……………三三

第五章 上人の布教……………三〇

 第一節 布教の端緒……………三七

 第二節 大谷本山の燒毀……………四〇

 第三節 地方中心の布教……………五二

 イ 吉崎の建立……………五八

 ロ 吉崎の退去……………七〇

八 攝河泉の布教……………

第四節 山科本山の建立……………

第五節 石山の建立……………

第六章 上人の入寂……………

第七章 上人の家庭……………

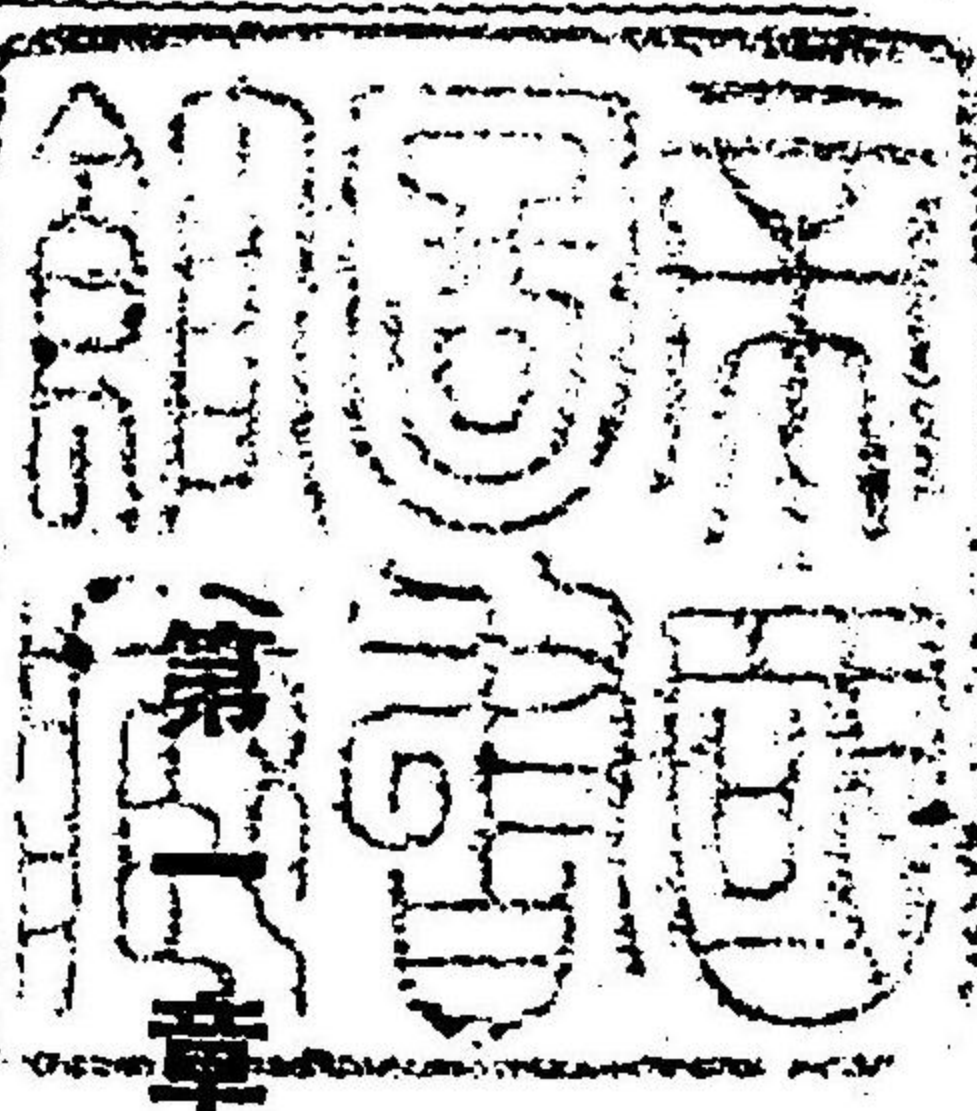
第八章 上人の教會……………

第九章 上人の化風……………

第十章 上人の著書……………

目次了

蓮如上人



蓮如上人以前の眞宗

文學博士 前田慧雲著

我眞宗は親鸞聖人に其基源を起し、覺如上人の時に、一宗としての形を成し、更らに蓮如上人に及んで愈々盛になつたのである、早く云へば今日の如き兩本願寺は蓮如上人に依て出来上つたのであると云ふても差支ない位であつて、古來より中興の祖と仰ぐのは最も至極なことである、そこで蓮如と云ふお方は、眞宗を研究するに就ては最も重要な位置を占むるのみならず、日本佛教の研究に於ても亦重要な地位にある方である、従て重要なれば重要なだけ、研究も困難と云はねばならない、之に加ふに史料と云ふものが完備して居ないから、

蓮如上人

學術的に歴史的に蓮如上人を研究することは、今日に於て頗る六ヶ敷問題である。然るに今これより述べやうとする所は、歴史的に研究する目的ではなく、修養に資するためである。換言すれば學術的研究でなく修養的に述べるのであるから、見る人も其積りで居て貰ひたい。

抑も覺如上人以後より蓮如上人までの間は、我真宗は如何なる情況であつたかと云ふに、覺如上人は丁度南北朝の時代即ち後醍醐天皇の正平六年に御入寂になり、其後善如上人が襲はれたが、此お方は正平十六年に入寂せられ、次で練如上人が其後を繼がれて南朝の後圓融院の元中八年に歿せられた、即ち南北兩朝媾和の前年で、足利三代將軍義滿が最も盛りを極めた時代であつた、其次に巧如上人が繼承せられて後花園天皇の永享十二年に寂せられ、其後が存如上人で即ち蓮如上人の父君に當らるるお方である、此存如上人は後花園天皇の長祿元年に入滅せられ次で法燈を繼承して本願寺の八代に立たれたのが蓮如上人であつて、前に申した善如上人から蓮師に至るまでの間は、凡そ八九十年間で、真宗が頗る衰頹した時期であつて、真宗の中絶とまで評判せられた時である、

然らば如何なる理由で中絶とまで云はるゝ様に衰へたのであるかと云ふと、之に就ては當時の社會の形勢を一言する必要があることと思はれる。

元中九年に久しく結ばれて解けざりし、南北兩朝の争も漸く媾和して、足利三代將軍義滿が政權を握り、諸般の制度を定めて、天下は先づ一寸太平の有様となつた、然るに此間でも全く日本六十餘州が平和になつたのではなく、九州の方では菊地、大内など云ふ一族が頗る勢力があつたので、中々幕府の命令を奉じなかつたのみならず、常に反抗して居たといふ有様で、應永六年には大内の亂があつて又一騒動を持ち上げ、全國漸く亂れ出した、其後義滿は應永十五年に歿して、其子の義持が將軍職を襲いだが、丁度此時にも上杉の亂があつたからして随分な騒動であつた、義教が次で將軍になつてから鎌倉の持氏と一族同志の争を起したので、關東は大波瀾を生じた處に、中國で赤松滿祐が叛して兵を擧げた、其結果は遂に義教殺害されたと云ふ悲惨な事に立ち至り、それから義勝、義政も將軍職に登つたが、勿論此間にも亂があつた、斯様な具合に社會は戦争の引續で殆んど一の寧日がなかつた有様であるのに、足利幕府は父祖の

勢に乗じて奢侈に耽つて居た、彼の義満が金閣寺を建てたことは勿論、義政に至ては實に傲奢の極を盡した程であるから、従て一方では財政の逼迫を來して借財を拵へ、他方では人民の膏血を搾り取つたから、社會一般は段々怨みを増し、其處にも一揆、此處にも一揆と云ふ有様で、遂には應仁の亂と云ふ大紛亂を起して、暫く暗黒時代と變化さしたのである。

如斯戰亂の間に在て佛教は如何なる形勢であつたかと云ふに、南都北嶺の諸宗は表面外形は中々盛であつたが、外形が盛大な丈けそれ丈け佛教の眞精神は失せて居て、其盛なと云ふのは輿を昇ぎ出して世間を騒がすとか大供養をして儀式だつた事をやるとか云ふ様なことで、國民に向つて佛教の眞精神を傳へて感化をすと云ふやうなことは一點もなかつたのである、而して唯禪宗が獨り佛教の力を維持して居たと云ふ有様で、義滿の時には鎌倉の五山に習ふて京都に五山を開き、禪宗の名僧大徳を請じて、尊崇も拂ひ、保護も與へた、されば此禪宗には稍々佛教の精神があつた様である、が然し之とても或一部の人のみに感化を與へたに過ぎなかつたので、宗教として社會の人々に佛教の功徳を傳へる

と云ふまでにはなつて居らなかつた、それから又淨土宗が關東に於て大分盛に弘まらかけて來て、彼の芝の増上寺の開祖たる西譽など云ふ大徳もあつたが、これとても唯關東の或一部に限られた丈で、廣くは及ばなかつた、要するに佛教諸宗はいづれも世間的の威勢を盛に張つて居たのみで、名利以外には些の信仰もなければ、佛教と云ふ觀念も無かつたらしい、唯僅に禪宗が武人の間に少し行はれたと云ふ位であつた。

佛教各宗が此の如き有様であつたと同時に、我真宗の如きも随分憐な有様であつた、然し斯くの如き亂麻に等しい形勢となつた社會に向つて、高祖親鸞聖人の精神を精神として、熱心に彌陀の本願を普通一般の人々に弘通することになれば、社會が亂れて居れば亂れて居るだけ寧ろ多くの功果を收め得たことであつたかもしらないが、惜い哉、覺如上人以後は餘り大學者も大徳者も出でずして、唯形式虚儀に流れて、熱心に信仰を鼓吹することを忘れて居たから、漸次に衰運に向つた様である、右に謂ふ如く蓮如上人以前の眞宗では一宗の骨目である安心までも亂れて居たことは、私一己の推測のみでなく、古人も既に其事

を述べて居る、彼の『本願訣』と云ふ書物の中には、
 蓮師以前には浄土宗の流義多くうつりて、種々の邪義出でたり、そのうつる
 所以は、建武以来の騒亂に依て諸宗共に佛法草昧なり、殊に以て大谷の御本
 廟は智恩院に相隣り、嘗に妻帯の故に別派なる迄の體に見えたるよし、或記
 に見えたり、之に依て多分は自力口稱に混じ、少分は十劫秘事に亂じて、當
 流の正義は誠に知る人稀なり。
 と云ふてある、又巧如上人以後は多く儀式に抱泥して布教などには餘り力を入
 れなかつた、之が全く宗門衰頹の原因であつた、此外形を主として精神を忘れ
 ると云ふ事に就ては、一家一國の盛衰も、同一轍であるから、注意することが
 肝要であらう、之も古人が既に巧如上人以後の様子を『破邪問答』の中に云ふて居
 る。

巧如上人の頃には、異義をのみ重んぜられたれば、それがために歸依者も少
 なくなりて、宗門は衰頹せし由に傳へ聞く云云

と、之等に依て見れば巧如上人以後、練如、善如と代を重ねるに従て、安心に

就ては智恩院等他宗の流義に傾いて、眞宗の眞宗たるべき根本義を失却し教會
 に於てはたゞ形式のみを重じて肝心の布教を忘却して居たらしい、そこで眞宗
 は中絶の體にまで衰頹して本願寺はその日の食物にまで困まる様なる苦境に陥
 りたのである。

祖宗の徳澤を問はば、吾身の享くる所のもの、是れ其の積累
 の難きを念ふべし、子孫の福祉を問はば、吾身の貽す所のもの、
 是れ其の傾覆の易きを思ふことを要す。

第二章 上人の誕生

斯の如く本願寺は極度まで衰頹の境遇に陥りたのであるが茲に至りて幸にして一新光明に接することになつた、それは稱光天皇の應永廿二年二月廿五日に我蓮如上人が眞宗再興の使命を帯びて、緑深き京都東山の太谷に於て誕生なされたことである、上人の幼名は布袋丸と云ひ、又幸亭丸とも申した、父君は存如上人であつて、幼少の時から餘程普通人とは異なつて、聰明穎悟であつたらし、而して母君に就ては種々の傳説があつて、確たる事は判らない、『山科連署記』には斯ういふ事が記してある。

御母儀は蓮如上人誕生し給ひて七才の時、何國ともなく失せ給ふ、加茂(京都)に(あ)の鳥居に御うふ衣かゝりたりとも、又石山(近江)の觀音の戸帳にかゝりたりとも、又自身には備後尾ノ道の者なるよし宣へり、然らば石山觀音の戸帳にかゝりたるよし申すこと實なるべし、石山の觀音と尾ノ道淨土寺の本尊は同一體にて、十一面觀音なり、蓮如上人も備後より參る人に、尾ノ道の事を

なつかしく思召して度々たづね給へり云云

斯の様な具合に頗る奇怪の事であつて、今日私が史料の少ない母君の事に關して考證斷定する事は到底出来ないと思ふ、『蓮如上人遺徳記』には

御母は何國の人とも知らず、人尋ねて何國の人ぞと申すと雖も、遂に云ひ現はし給ふことなし云云

と記してある、つまり母君は如何なるお方であつたか判然して居ない、果して然らば素性の分らぬ取るに足らぬ母君であつたかと云ふと決してそうではなかつた、上人の六歳云々と云ふことに就ては、連署記の初めには七歳云々とあるが、其終りの方には六歳としてあるのみならず、其他の書物に悉く六歳としてあるのを見ると、六歳の御時に母君にお別れなされたのが事實らしい、六歳の時に母君にお別れなされた事は上人の一大不幸であつたに違ひはないが、逆縁が順縁となるとやら申す如く、上人の御生涯に取つては千萬金の價ある教訓であつたらしく思はれる、上人が當時のお概きは非常なもので、前の遺徳記の中にも備後から參詣した人には、涙と共に尾ノ道の様子を懐しくお聞取なされた

とあつた如く、其『遺徳記』後段には、

先師(蓮如上人)廿八日を以て其命日とし給ひて、御志を運び給ひけり、然るに六才の御像を暮齡に至て書圖せらる、其銘に曰く

本名を布袋と名づく

名乗を幸亭と號す

六歳にして母に別る

當に明應八年に八十五歳に終るべし。

之等に依て見ても如何に母君を慕ひ給ひしか、又一生涯、六歳の幼時にお別れなされた事を常にその心に銘せられてあつたことも判るであらう、上人が此母君の愛をお忘れなさらなかつたと云ふことは、後の御活動に多大の影響を及ぼす事柄である。

此前にも話した如く母御は果して如何なるお方であつたか、其緣由が分らぬと云ふと、何となく妙に可笑しく思はれるであらうけれども、決して其人格の下賤な方ではなかつたらしい、餘程賢いお方で、普通の婦人であつたとは思はれ

ない、尤も上人をお産みなされて六年の後、即ち蓮如上人が六歳の御時に、突然その御相を隠された事情に就いては、史料が缺けて居るから、今斯々であると推測し断定することは出来ないけれども、その將に相を隠さるとなされた時に、幼なき上人を膝下へお呼びなされて、宗祖聖人の一流たる、他力微妙の本願を弘通し、再興せよと、懇ろに御奨勵なされしことは、確に母御の人格を現はし得たことであると思はれる、ツマリ母御が如何に平素からの嗜みが氣高くであつたか、如何に宗門の事を慨いて居られたかと云ふことが、推量できるであらう、『遺徳記』の中に、

應永廿七年先師六歳、十二月下旬第八日に、母堂六歳の小童に對して、語り給ひけるには、願くば爾の御一代に聖人の御一流を再興し給へと、懇ろに心腑をのべ給ふが、そのまゝいづかたともなく、出で給ひき云々

之に依て見ると上人の母御は、得易からざる賢婦人で、平生から非常に眞宗の衰頹を慨かれて、一宗再興の願望を持たれたことは明なことで、蓮如上人が後日一宗中興の大功績を挙げられたのも、其源は母御の此一言の奨勵から成り上

つたものである、父君たる存如上人が蓮師に對して御獎勵の語を發せられたことは傳記の上に見えない、此點から考へて見ると、父君の存如上人よりも、御家内即ち母御の方が餘程勝れて賢いお方であつたと思はれる、世間で母君は石山觀音の化現であるとか、加茂明神の化身であるとか、種々云ひなすのは、全く謂れないことではあるまい、之に依て見ても如何に母君のシツカリした御方であつたか、如何に奉佛の心の深い、徳の高いお方であつたかが判るであらう、蓮如上人が叙明にして徳澤萬世に輝き、お互が今日欽慕追仰措く處を知らないのは、半ば母君の感化であらうと思はれる、子供に對する母親の責任と云ふものが、如何に重大であるかを知つて貰ひたい。

嘗て宗祖聖人に就ての所感を述べた時にも、一寸話した如く世間の事は何事でも婦人方の力を假る事が必用であるが、特に我真宗は初めて宣布せられた時も、其後繼續維持せられた時も、悉く婦人の力に依て成されてある、即ち親鸞聖人が真宗を弘通なされる時には、御家内たる惠信尼が畢生の力を盡して、其全身を弘法のために捧げられ、親鸞聖人が御遷化後は、御息女覺信尼に依て之を繼

續せられた、更に存如上人の頃になつて、真宗中絶とまで噂せられた時には、その御家内即ち蓮如上人の母君が、我身を隠して六歳の幼兒を戒め、是非々々爾が一代に真宗を再興せよ、一切の人々を救へよと仰せられ、蓮師が其一言に感激して遂に佛法興隆、真宗再興の實を擧げられたのである。

而して此惠信尼は人の妻として、又蓮師の母君は人の母として宗教にお盡しなされた好模範であつて、覺信尼は人の娘としてお盡しなされた龜鑑であるから、一般寺院の坊守方や、娘たちは能く味ふて貰ひたいものである、又檀家や信徒の妻女たちも此間の消息を承知して、世間の事や、一家の事に、充分注意して王法佛法、共に目出度く守つて貰ひたい、即ち惠信尼は妻たるもの、真宗に對する手本で、覺信尼は娘として真宗に對し、蓮師の母君は人の母として真宗に對する手本である、斯く云ふて見ると、我真宗が危機に接した時には、必ず婦人の力で挽回せられた有様で、女子は真宗に就て重大に因縁のあるもので、既に前に申した先睡のあることであるから、真宗に名をかけた、母たり、妻たり、娘たるものは、自身の位置が如何に重大であるか、自身は如何に大なる責

任のあるものであるか、又如何なる事を盡せばよいかと云ふことを自覺して、永く睡れる佛教徒の夢を覺し、大いに一宗の繁昌を計つて、共に佛のお慈悲を喜ぶ身になつて、妻は夫を扶け、娘は親を助け、母は子を勵まして、眞宗の興隆に越く様に力めて貰ひたい。

特に今日の母親たる人に注意して貰ひたいのは、眞宗に流を汲む寺院や信徒の子弟が學校に入學して、中學、大學と勉強するに就ては、金錢衣服等の心添も必要であるが、唯それのみならず、時々自分の新發意や子供に手紙を以て、懇ろに汝は眞宗の僧侶となつて、世界の人に佛の慈悲を傳へる身分で、成業の上は身命を捧げて眞宗のために社會のために盡さねばならぬぞよと、眞心こめて忠告し、且つ獎勵して貰ひたい、之は一寸考へて見ると何でもない様に見えるであらうけれども、冥々の裡に非常な利益效能のあることで、遠い山河隔てた旅の空で、眞心こめた親の手紙を貰ふ程ありがたしいものはないから、涙を以て其芳志を謝して早く成業する様になり、且つ立派な宗教家として蓮如上人の御代役を務る様になるのである、又たとひ當時左程に難有く思はないでも、

事に觸れ物に接して早晩か自覺する時が来るものである、萬望上人の母御に習ふて、其邊の處に注意して母たる務を怠らない様にして貰ひたいものである。

富貴叢中に生長すれば、暗慾は猛火の如く、權勢は烈焰に似たり、若し此の清冷の氣味を帯びずんば、其の火焰、人を焚くに至らざれば、必ず將に自ら燃んとす。

第三章 上人の立志

既にお談致した如く上人が六歳の時に母君にお訣れなされ、其時母君が呉々と是非上人の一代に眞宗再興を遊ばす様御奨勵なされた、頑是ない六歳の小兒ではあつたけれども、英敏い蓮師の事とて、其訓戒が頭腦に深く沁みこんで、其後母君を慕ふ心の切なる度に、そのお言葉を思ひ出されて奮勵の助とせられた、勿論何を申しても幼少の時であるから、一宗再興と云ふ事に就ても極めて抽象的にボンヤリとした考が上人の頭腦を支配して居たらしい、それから漸次に年齢を加へられるに従て、其考が大分具體的即ち形の上に現はれる様に判然とした有様となつて來た、之は丁度上人が十五歳の頃であつたと思はれる、『遺徳記』の中には、

先師十五歳より初めて眞宗興行の志切にして、一宗の中絶せるを、前代仰せたることを遺恨に思召し、如何してか、われ一人に於て聖人の一流を諸方に顯はさんと、常に念願し給ひ、遂に再興し給へり。

と云ふてある、『御一代聞書』の中にも

蓮如上人御弱年の頃御迷惑のことに候ひし、唯御代に佛法を仰せたりと候。んと思召し候御念力一つにて、御繁昌に候、御辛勞ゆへに候。

之は何歳と云ふ年齢がなく、唯御弱年とのみ云ふてあるから判然せぬけれども、遺徳記の文言と對照して見ると、十五歳前後の事であらう、それで上人が十五歳で志を立てられたと云ふのは、一宗再興の志が頭腦の中に根をおろして動かなくなつた處を云ふたのであつて、そんな志が頭の中に浮んだと云ふのではな

い。抑も此立志と云ふ事ほど人世に處して必要なものはない、何でも彼でも先づ志が立つてから初めて成就するもので、古人も『志の立つたのは事を半ば成功したと同様ぢや』と云ふたが、成程至言である、勿論『志を起す』と云ふ位のことには誰しも出来ることで、われをやつて見やう、是れをやつて見やうと、志を起すのは易いけれども、其起した志を立て、根をおろし、風が吹いても雨が降つても、たとひ如何なる誘惑が來たらうが妖魔が襲ふが、大盤石も管ならぬ有様で、ウ

ンと志を立てると云ふ事は、實際中々六ヶ敷い事柄である、而して其六ヶ敷いだけそれだけ最も必要なことで、青年を初め何か事業をやり活動をなさん、宗教のために盡さんと云ふ様な人々は、是非早く志を立てねばならない、古人の上を眺めても豪傑と云はれ偉人と崇められる人は、概して志を立てる事が早い、何時までも志が立たぬと云ふ人には碌な人間が居ない様である、失敗したとて悲んだり、社會を譏つたりする人の多くは、悠々閑々、あれも面白い様だ、是れもうまい仕事ぢやと、十も二十も志を起して徒らに奔命に疲れ、意氣を消耗せしめて、立志を知らずに過した人である様に見受けられる、なんと立志の價値は重大なものではあるまいか。

孔子でも「十有五歳にして學に志す」と云ふて、志を立てたと云つたではないが、唯ボンヤリ學問でもして見やうかと云ふ心が起つたのではなく、立志一番學問すべく決心したと云ふ意味であらう、又法然上人も「源空三五の齡にて、無常の理さとりなき」云云、之れも十五歳の時に志を立てられて、ドツシリ、地盤と目的を定められたのである、或人の話に梁川星巖と云ふ人は今日では一個の詩人

として世に知られもし、尊ばれても居るが、實は一個の詩人のみでなく、陽明學を研究して其上にも幾分か貢献し且つ造詣のあつた人である、今暫く世人の見る如く一個の詩人として之を見ても、矢張り凡人でないと云ふ事が窺はれる、其譯は彼は志を立てる事が至て早く、遂に其志を成就したものである、彼が極壯年の頃に己は詩を以て世に立つのであると云ふたさうであるが、果して其通り詩を以て家を立てた、如斯真に志を立て、仕上ると云ふ事は中々凡人では出来ない事で、志を立てるに就ては自分の氣性や趣向を自認して、之れが最も己れに適ふた事で、之を果すために人世に出たのである、之をなすのが天職で人世を益する事が出来ると思じた處で、初めてアレもコレもと騒ぐのをやめて志を立て得るのである、志を立てるのは一寸易い様であるが其實なかく困難で、而も青年たるもの、並に醉生夢死せぬといふ考の人には肝要此上ないことである、志を立てることが一日早ければ立身も一日早く、一日遅れると一日の悔を残すことになるから、偉人や先賢の立志の程を伺ふて、學問、教育、商工業其他何でも彼でも一事業を起こして感化を及ぼさんと欲するものは其志を早く立

てる事につとめねばならぬ。

斯の如く志を立てると云ふことは、此上ない必要なことで、志が一度立つと云ふと、其後は學ぶとであらうが、教へるとであらうが、その他見聞することを悉く其志の方へ用ひ、其志を達する助けとして行く様になる、そこで總てのものが決して無駄にならぬ様になり、たとひつまらぬ些細な事と思ふ事でも、志が立つて居る處の人から見ると、其些事が見捨て難い、趣味と實益のあるものとなつて、萬事が自分を保護し、自分を勵し、自分を目的地に達せしめんとする様に感じて、愉快に活氣あることが出来る、此處に宗教家にならんと、志を立てた者があると假定するに、其人が學校に入學して、百科の學問を修むるに就て、如何なる注意を以て學科を學ぶかと云ふに、自分が修むる學科は自身が志に向つて、即ち目的とする處に向つて、如何に役に立てやうかと云ふことを念頭に離さず學んで行く、物理學や、化學の様な直接に宗教に必用の少ない學科も、世間の人には中々重大な學問であるから、自から宗教にも必用である、此等の學科に對しても之が如何なる材料になるか、如何に利用すべきかと云ふ

考が常に離れぬから、其學科が身について、其目的即ち志のために非常な働をなす様になり、一として無駄事がなくなつて来るから、志を達し目的を成就することが非常に早くなつて来る、之は私自身に於ても、今日から顧ると、立志が出来て居なかつたために、非常に無駄事をやつて居たことが澤山ある、つまり志が立つと云ふと、好機會は常に目前に横はつて居るものであつて、今日多くの青年が、愚痴を溢す様な事はない筈である。

青年諸君は其處に心を用ひて、志を早く立てねばならぬ、否此事は青年とのみに限つた事ではなく、壯年や老年になつて居る人で、まだ志が立たぬ様では、不安心不愉快であらうから、小野道風が晩年から書を研究したり、太田道灌が壯年を過ぎて歌道に心を用ひたと云ふ様な例は古來から随分澤山あるから、青年壯年の別なく、皆志を立て、今日の社會に處して自信教人信の實を擧げて貰ひたいものである、斯の如く志を立てることは重要な事であるから、成るだけ早く立志する必要があると思ふ、我蓮如上人は十五歳の時に、將に倒れなんとする眞宗を興隆し混濁の渦中に迷ふて居る社會の人々に佛の大慈悲を知らしめん

と、其志を立てられた、之を彌陀如來の上で見れば發願である、斯くして遂に御一生の中に於て衰へきつた眞宗を再興なさることが出来た、然るにいくら志が立つたと稱しても其志を成就する勉強がなくては駄目な事で、其勉強が伴はぬものは立志でなく、僅に志が起つたといふに過ぎない、志を立てるといふ以上は、勉強も自から之に伴ふてこねばならぬ、彌陀佛でも願行の二つが揃はない時には、救済の道を行ふことは出来ない、如何に立派な本願でも之に行が伴はない時には、死物同様で、願は行で成立ち、行は願で價值があるのである、いくら今日流行する處の理想々々と偉ぶつても、實行が伴はぬ時には到底其理想の實現は覺束ない事で、折角の理想も机上の空論となつて仕舞ふ、而して蓮如上人が十五歳に立志せられてから、其志を成就するには如何なる修行をなされ、如何なる修養を積まれたかと云ふにそれは次の如きである。

第四章 上人の修學

蓮師の修學を談すに就ては、先づ其順序として、當時上人の境遇が如何であつたか、即ち上人の修學に最も關係のある一家の經濟は如何であつたかと云ふことから談さねばならぬ、學問と云ふものは何れ自身が勉強するものであるには違ひないが、其勉強に學資金の豊富になると、缺乏なるとは亦非常に影響するのである、資金が豊かな中で勉強することは、非常に手易いことであるが、資金が乏しい中で勉強することは頗る辛^つ苦い事である、その辛^つ苦い間に立つて資金の缺乏と學問の苦しみに打勝つて、遂に其目的に向つて進むには、そこに非常な忍耐力がなくてはならぬ、今上人の學資金は豊かであつたか、忍耐力は如何なる有様で、修行の辛^つ苦は如何ほどであつたかと云ふに、先づ其當時の本願寺なるものを考ふるに、今日の本願寺とは雲泥も霄ならぬ相違で其時の本願寺は智恩院の末寺であると、見違へられる位のもので、勢力がさう思はれたのみならず、その外形も至極衰れなもので、本堂坏と云ふところも極々お粗末な、

小さいものであつたらしい、記録で察すると本堂が三間四面で、御影堂が五間四面であつたらしい、『實悟記』にも

大谷殿は本堂は三間四面、御影堂は五間四面也、ちいさく御入候つる事に候斯様な次第で、召使の人も漸く五人位の小人數であつた、一人に就て一年に五十匹の給料をやると云ふ約束で、お召使なされたものでも、其給料をやることが出来なかつて、十匹二十四匹位いしか下さることが出来ない有様であつたと云ふてある『御一代聞書』にも

人をも甲斐なくしく召し使はれ候はである上は幼童の襦袢をも一人御洗ひ候と仰せられ候。

之は既にお子供が出来た後の事であるのは明かなことで、蓮如上人が大分お年を召された頃の有様であらう、此時にすら右の様な有様であつて見れば、蓮如上人の幼時から學問をなさる時代には、如何に貧困であつたかを推察することが六ヶ敷はない、今日の門末は之を聞いても、多少感奮する處がなくてはならない、自が親慈聖人の御代理を務め、蓮如上人の御名代をして居るものであると

云ふ、自覺だけでも望みたいものである。

それから三度くの御飯なども、時によつては二日も三日も召上らない有様で一方ならぬ困難をなされた、『御一代聞書』の中には

二三日も御膳まゐり候はぬことも候由承り候云云

などと書いてある、お互が今日佛物に衣食したり、社會の恩澤に依て、飽食暖衣徒に枕を友として、其職分を怠り乍らも、少し御飯が遅れたり、魚菜を供せられた時には、妻や下女や、或は供養する門徒に對してまで、不服を云ふのは實に物體ないことであらう、それから味噌汁の如きも、一人前の分に水をドッサリ入れて、三人して召上つたと云ふ事が、或傳記に見えて居る、又お召物なども、布子即ち木綿物と、紙子といふて紙で作つた、コワゴワしいお粗末なものばかりであつた、白衣の如きも裏は皆紙子であつて、袖口の見える處だけが僅に絹であつたと云ふ位で、綿の如きもフワフワした新らしいものは見ることが出来ない程で、漸く古綿を取寄せて一人でおひろげなされたと云ふことである、又平生お用ひなさる湯水の如きも、常に水ばかりで、如何なる寒中でも

湯ではお洗ひなさらなかつたらしい、殊に後年裕福になられてからも、冥加の程を思はれて、矢張りさういふ風であつた、『御一代聞書』に

前々住上人は(蓮師)昔はごふくを召され候、白小袖とて、御心やすく召され候事も、御座なく由に候、いろく御悲しかりける事ども、折々御物語云々又曰く

昔は佛前に伺候の人は、もとは紙絹に幅をさし着申候、今は白小袖にて、結句着がへを所持候、これ其頃は禁裏にも御迷惑にて、質をおかれて御用にせられ候と、ひき事に御沙汰候

又曰く

又仰せられ候、御貧く候て、京にて古き綿を御とり候て、御一人ひろげ候事あり、又御衣は肩の破れたるを召され候、白き御小袖は、美濃絹のわろきを求め、やう／＼一つめされ候よし、仰せられ候、當時は斯様の事をも知り候はで、あるべき様に皆々存候ほどに、冥加につき申べし、一大事なり。それから山科連署記には、此有様を

召物には、紙子を召され候、絹の類とては無之候、白御小袖にはごふくめん一つもたせられ候、其時の御子達は皆々里養こやしなひに御入り候、御そばに御座候は願成就院殿(准如様)ばかりにて候、其他、蓮乗は南禪寺の喝食かつしき、北林坊は華界院、若松殿は丹後へ御下し候、今の人々誰かこれ程に悲しき人候哉云々

斯んな體たらくで、極めて御難澁なお暮向であつた、さればなか／＼書物を初め筆紙まで思が儘に用ひることは、出来難い事であつたのみならず、夜の書見の燈火も、油を買ふ金が無かつた爲めに、思ふに任せぬ苦辛をなされたと云ふことである、『遺徳記』には

それより以來、學問に心をつくして研精ならびなく、切瑳世にことなり、涼焰ときを分たず、或は炎夏の短夜には、燈を聚めて車胤が古事を訪らひ、玄冬の寒夜には、雪を携へて宣士が舊儀を試む、然るに其頃は未だ一流の儀しかく／＼と知る人多からざる間、他門他家の覺も幽微なり、しかれば常に人におそれ世を憚りたまへり、聖典を拜するにも、竊に人看を忍び、是を閲し給ふにも或は隔壁の燈のすさまより漏光を得、或は閑晴なる夜は、青霽に澄る

月暉をもて、文籍を披て師釋に心をつくし、斯のごとくして教行證の文類、并に六要鈔四部の釋義を引合せ是を涉獵し、具さに恊視して深旨を極め、書の肝府を抽て彼要文をば作出せるなり云々

此遺徳記の文章は少し裝飾がある様に見へるけれども、これ強ち誇大とのみ排すべき文字ではない、『御一代問書』の上にも殆んど同様なことがある。

よろづ御迷惑にて油をめし候はんにも御用脚なく、やうく京の黒木を少しづつ御とり候で、聖教など御覽さふらふ由に候、又少々は月の光にても聖教を遊ばされ候、云々

之に依て見ると、非常な御苦辛をなされて學問せられたとが判るであらう、その苦學と云ふのも遺徳記にある如く、人を憚つて成るたけ人の目にかゝらぬ様に物議を惹起して學問の妨げとなつたり、他の猜を受けぬ様に御勉強なされた、則ち一方には智恩院があつて、常に蓮師の様子を睨んで居るからして、思はぬ心配があると同時に、人目を忍んで夜中聖教を御覽になるには、金がないから油が買へないといふ始末で、いろく容易ならぬ御苦勞であつたのである。

勿論今日とは時代に非常な相違があるから、蓮如上人の逆境と苦學を、其儘今日の青年に適用して時々飯も食ふな、燈火は折々雪や笠を用ひるがよいと云ふのではないが、其精神は學ばねばならぬと思ふ。

それから蓮師の研究法は如何であつたかと云ふに、他宗の學者は叡山や奈良に、可なりの方もあつたが、我真宗の學問を修めた學者は全く無いので、誰一人として御指南致すものがないから、師匠の教授を受ける事なく、唯獨學で御研究をなされたのである、斯様な境遇にあり乍ら内外の學問を修めて、正に倒れなんとした眞宗に堅固な土臺を築き、枯渴しきつた信仰に慈悲の泉を注がれて、平民的、社會的大宗教たる我真宗を中興なされた、而して此中興の源を尋ねれば勿論燃ゆるが如き信念のあつたとは明であるが常人の及ばぬ勉強と忍耐を積まれて、茲に再興が成就したのである、其後に於ける上人の布教の仕方、信徒の取扱方、法義の談し具合等、總て此修學中の辛苦艱難の實驗から現はれて來たものであると思はれる、「艱難汝を玉にす」と云ふ古諺があるが、蓮師の温容玉の如きは、全く非常なる逆境に處して、圭角を取り去られ給ふたからである。

第五章 上人の布教

上人の布教は御弱年の時、まだ本願寺の住職になられぬ前から始まつて、御退隱後、臨終の夕まで其御一生涯を通して、唯是れ大悲を普く傳へんが爲にお盡しなされた、實に蓮師の御一生涯は貧困並びに誹謗迫害と闘ひつゝ、布教に御盡瘁なされた歴史に外ならぬのである。今日百萬の僧侶も徒らに殿堂の宏壯や、因縁談に涙を流さずに、少しく蓮師の此御生涯に考へ及んだならば、文盲の翁媪も博識の僧侶も、否世間一般の人達も、屹度その御精神の程に感泣一番奮起せねば居られまいと思ふ。それで『上人の布教』といふ題目の下で述べたい事柄は、なか／＼數多いから、先づ初めに大略を談しておいて、然る後にその要所要所を項を分けて詳しく談すことに致さう。

さて上人の御弱年の頃に江州の金森といふ在所に、道西と云ふ人があつた、これが金森の善従といはれた人である。その人が上人は眞宗再興の御志のあることを知つて、自分の宅へ時々御招待申して法筵を開き、近邊の老若男女に御法

話を聞かして貰ふ様にし、其他種々に心配して上人の御志をそれとなくお助け申した、そこからして追々に法話を聞きに集まるものが多くなつたといふ様な處からして、上人の御布教が先づ端緒に就いたらしい。上人が三十歳になられた頃には餘程法義も引立つて來る様になつて、文安四年の五月、丁度三十一歳の御時に、關東へ宗祖親鸞聖人の御舊蹟を巡拜に御發足なされた。それに次いで北國の御巡化をなさることになつたが、此兩度の行化には所謂草鞋竹杖で、山河を跋涉し随分と辛苦艱難を遊ばされ、到る處で眞宗の教義をお勧めになつたので、其土地には以前と變つて法義の芽が萌して來る様になつたのである。長祿元年、四十三才の御時、不幸にも御實父の存如上人が御遷化遊ばされた、前にも申した如く御實母には六歳の時にお別れになつたのであるから、お残り遊ばしたのは御繼母である。處が我子といふものは可愛いもので、繼母の實子に應玄といふ方があつたのを、父御の存如上人が遷化遊ばしたるに就ては是非蓮如上人を排して實子の應玄を本願寺第八代の住職にしたいとの考があつたらしい。然るに茲に上人の叔父に當らせらるゝ、青光院宣祐と申す方が、蓮師を

相續人にするといふのが、先任の御遺命であると、固く主張せられて、愈々上人が本願寺第八代目の法燈を繼がれることになつたのである、蓮師が御住職なされた後の本願寺といふものは、先代から見ると餘程盛になつたらしい。ツマ、幼ない時から上人が關東に北國に、席が暖まる閑もない御苦勞の結果が現はれたからである。されば何事でもお互に空談するよりも先づ實行苦辛せねばならぬ、さうすると屹度好い結果が現はれてくる様になるのである。

寛正二年、親鸞聖人の二百回忌を修せられた、此時にも諸國の道俗が大分參詣したらしい、そこで朝廷の方からも、種々御取持があるといふ様子になり遂には日華門までも建立されたといふ有様になつた。ところが世の中はさううまくトントン拍子には行かぬもので、端なくも叡山などの嫉妬を招くことになつた。そこで寛正六年五十一歳の御時、正月九日に叡山西塔の執行慶純といふ者が巨魁で、澤山な山法師凡そ四百餘人を語合て、夜中不意に大谷を襲ふたので、防禦のない大谷殿堂、何條たまるべき、滅茶苦茶に打壊して火をかけられたから、上人は早速御眞影を供奉して、ソツと江州の大津にお逃げなされた。此大谷の

殿堂が焼打された後といふものは處々に御住居なされたものらしい、然し處々と云ても重もに京都と江州の間に於て、處を變へて住はれた様に見える。それから間もなく彼の名高い應仁の亂といふものが起つて、帝都たる京都は大戦争場になつて仕舞つた。そこで江州の堅田に移つて布教を遊ばしたが、何しろ十餘萬の將卒が對陣して十一年間も續いたといふ大戦争のことであるから、京都近傍は實際布教どころの騒ぎでなかつたのである。仍て應仁二年、御長男の實如上人に一切の寺務を御委任なされ、自らは東北諸州へ行化にお出なされた。東北の行化を卒へてお歸りになりてから文明元年の春、即ち五十五歳の御時、叡山の惡僧が再び堅田の本坊を襲ふて來るといふ風聞があつたので、如何に所置したらよからうかと、段々評議があつた時、大津の濱名太郎左衛門といふものが新しい殿堂を立て、御眞影を御安置致したいと申出た。そこで二月十二日に堅田から和船で大津に着いて、御眞影を濱名の建てた新堂へ御安置することになつた處が此濱名は三井寺の滿徳院と頗ぶる入魂であつた、依て其滿徳院と協議をとげて、三井寺の南別所を借受け、其處に小さいのを建て、引移る方が、

萬事安全であらうといふことになつた。それに依て漸く叡山の悪僧が襲撃を免れることが出来たらしい。

然るに何分當時の叡山の勢力といふものは非常なものであつて、たとひ直接に襲ふて来ないにしても、壓迫力が強いので到底そこに長居して法義を弘通することが出来なかつた、そこで文明三年の初夏上旬の頃に、ソツと大津三井寺の南別所を忍び出て、北國の行化に出かけられた。諸君は北國の行化とでも云へば、招待にでもおうて、ハッ、出かけられたかの様に想はれるかも知れないが、なか／＼招待どころの話ぢやない。此方から平身低頭して、どうぞ法義を聞いて呉れる様にどうぞ佛の慈悲を喜んで呉れる様にと、迎もハ、今日の勸財使僧などが金をたのみに行くのと比ものになる御布教ではなかつたのである。

今日の言葉で申せば實に奮闘的の御布教であつた。献身的の傳道であつた。紙一枚で動かされる様な御布教ではなかつたのである。此の點も今日の吾人は大いに景慕致し且つ反省せねばならぬことであらう。

其年の七月になつて、越前國の吉崎の地を下して、一字の堂舎を御建立遊ばす

どになつた。而して此建立に就ては國守の朝倉敏景夫婦が、従前から歸依してゐた處からして、餘程お力添をしたので建立も早々落成し、法義も其近郷近邊と漸次に潤ひ渡る様になつたのである。然る處越前には豊原寺、平泉寺の大坊が、城廓を構へてゐると同様な状態で、其方からの壓迫が時々やつて来るものであるから、蓮師の御布教は公然と思ふ様にやること叶はず、法義弘通の點に就て非常なる注意を拂はれたらしい。參つて来る同行や集まる信徒どもに、諸法諸宗を誹謗してはならぬぞよ。自身から念佛者たる振舞をして呉れるなど、諸宗の嫉妬猜忌を避ける様に注意しながら、一方には王法爲本、仁義爲先といふて、四面敵の其中で眞宗の教義を勧められた。

然る處、又々不幸にも文明六年に至つて吉崎の堂宇が火災に罹つて、一夜の間に一山悉く灰燼に歸して仕舞ふた。その後、又富樫政親の爲めに攻寄らるゝ事になりた。之は全く下間蓮宗の企畫から起つたことで、上人に取つては大變な御迷惑などであるが、事既に茲に及んでは致方がないから、遂に文明七年の九月、吉崎を遁れて、若狭國に向はれた。若狭から丹波路を越へて攝州へ出られ、一

先づ富田へ御着になつて、更に河内國の出口にお戻りになり、翌八年三月、紀州に行かれた、これが即ち現今の鷲森別院が建立せられた時である。それから大和路へも行化遊ばしたらしい。其後は河内の出口を根據地として、攝、河、泉、紀等の諸國を、おもに御布教なされた様である。

文明九年十月になつて、江州金森の善從即道西房が、出口へ御伺候申して、山城國宇治郡山科に格好な土地があるから、本坊を御建立に成たら宜からうと、御勧め申上げた。乃で翌年の正月に出口を御出立なされ、山科に移つて、彌々本坊建立に定まつたけれども、普請が其年内に出来あがらないから、江州の近松で越年遊ばされ、翌々十二年の八月に御影堂が落成したので大津に御安置申してあつた御眞影を移して、其年の報恩講は山科で賑々しく執行になり文明十四年の四月に本堂の建築が出来た。之で大谷の殿堂が叡山の悪僧に焼拂はれて以來十八年目に兩堂が揃ふたのである。

文明十五年に豫て寺務をお委ねになつた、長男の順如上人が遷化遊ばされ、延徳元年上人七十五歳の御時に實如上人に御住職を譲られ自らは信證院と稱して

御退隱なされた。上人は前後三十三年の間御住職をなして居られたが、此の間一日の休みもなく、兵馬倥傯の間を、東西南北と駆け廻り、誹謗迫害の其中に處して、孜孜として傳道布教に粉骨あそばされたのである。普通のものなら隠居した後は、插花や點茶で一生を樂に過すであらうけれども、蓮師の燃ゆる如き信念は決して、無爲徒食を許さず、如何にしても法義の盛大を致さしめんと、寺務だけは實如上人に御譲りになつたが、法義の傳道は一身に負ふて行化に力を盡された。

明應五年八十二歳の御時に、大阪の石山に別院を建立して、隱居の開教場と遊ばした、同七年の四月になつて、大病にお罹りなされ、取急いで悪くはならなかつた様であるが、何分御老體のことであるから全快といふことに立ち至らず、十月頃から御容態が悪るいといふので、翌年の二月に山科に歸られ、三月二十五日に、斯土の化縁盡きて遷化遊ばされたのである。

第一節 布教の端緒

前來は上人の布教を始められてから其終りまで、經過の大體を述べたものである、仍てこれから其要點を捉へて即ち

- 第一 布教の端緒
- 第二 大谷本山の燒毀
- 第三 地方中心の布教
- 第四 山科本山の建立
- 第五 石山の建立

の六項に分ち、而して第三地方中心の布教の下に更に吉崎の建立、吉崎の退去、攝河泉の布教の三項を分てその事情を少しく詳しく話して見やうと思ふ、然し乍ら史實を種々な書物から考證して談す閑もないことであるから、大略斯ういふ模様であつたいふことを知らせるまでゝある。

さて上人御布教の初めは粗々御齡二十歳すぎであつたらうと思ふが、どういふ處から布教の端緒を得られたかと云へば、前にも述べた江州金森の道西房善從、これが中々の篤信の人であつたと見えて、常に大谷へ參詣してゐた處が、或一

日、上人が道西を側近くお呼なされ、懇ろに真宗の法義を御物語あつた、そこで道西は欣喜雀躍して、此方こそ真宗再興の方に違ないと合點して、どうぞ御招待申上げたいと云ふところから、毎年二三回道西の宅へ御出になり、近所近邊に法義が傳はり、だん／＼と金森邊に無二の信者が出來ると云有様になつたのである、此事は『遺徳記』の中に

江州金森といふ處に道西といふ徒弟あり、此人先師（蓮如上人を指す）に常に昵近せしめて、佛法興行の旨、より／＼閑談し、金森の道場に高駕を寄せ、御門葉を集めて法話を聽聞させけり、總じて此人勸化を致して御門葉を建立せしむ、それより以來、三十有餘の時分に至つて佛法弘通し深義漸く現れて上人の御本意既に達せんとす、例へば含花の雨露の潤を受けるが如く、日圓浮に臨んで、明くる頃の日の出づるが如し。

それから『山科連署記』には

金森の道西と申せし人、後には善從と申し、大谷殿へ參られたる時、存如上人の御前に伺候さふらふを、影より蓮如上人御招きにて召寄せられ、凡夫の

佛になることを御懇に御物語候、道西承り難有ぞんじ、年々二度三度も江州金森に入参なり候てより、少々法義開き申候、斯様に金森に御出あつて、佛法の一理仰せ立てられ、御法義弘まり候。之に因て見るも善従といふ人は餘程篤信な人であつたらしい、又『御一代聞書』の中にも

金森善従に或人申され候、此間こそ徒然に御入りさふらひつらん、と申しければ、善従申され候、吾身は八十に餘るまで徒然といふことを知らず、其故は彌陀の大恩の有りがたき程を存じ、和讃聖教等を拜見申し候へば、心面白くも亦尊きこと充滿する故に、徒然なること更になく候、と申され候由に候。

といふてある。

それから蓮師は、此善従を法然上人の化身であると、世上に云ひ囃されると仰せられたことがある、それ程までの篤信者であつた、以上は口の上での御布教を御輔佐申したといふのであつたが、「筆の布教」即ち著述に就ても、最初は矢

張り此の善従の請に依て初められたのである。

寛正元年に『正信偈大意』、即ち現に『お假名聖教』の一として残つてゐるのを、書かれたのが筆の上の御布教の初めで、抑もこれが善従が御願ひ申したから書かれたのである、それから山科へ本山を建築したのも、亦此道西房善従の手引であつて、實に蓮如上人の忠臣たるべき人である、否、真宗中興の大功臣といふてもよいのである。

而して又、上人が布教をお始めになつた頃、江州の堅田に法住といふ人があつた、これが又善従の様に、上人の真宗再興を非常に御輔佐申した様である、此人も近所近邊の人々を引連て、法義聽聞に度々参詣したといふことである、斯様に善従とか法住とかいふ篤信なものが、お世話をした處から、門徒が増し信徒が殖えて、上人が三十歳になられた頃には餘程法義が引立つて、中興の端緒が開けて來た。然る處、關東は宗祖親鸞聖人の立教開宗なされた土地であつて、從て遺跡も多く、所謂二十四輩の寺院も残つてゐるのであるが、星移り物變つて、昔の面影は漸く失せ、蓮師の當時に於ける關東の法義は非常に衰へて、

折角宗祖が御苦勞なされたのも、今は水の泡となつて仕舞ふたといふ状態であつたから、蓮師は頗る遺憾に思召されて、是非とも此有縁の地に再び彌陀の慈光を輝したいものであると、御年齢三十一歳の文安四年に關東の御遺蹟巡回をお始めになつた、それに續いて北國の方へ御巡化になつたらしい、『遺徳記』の中に。

寶徳元年はじめて北地に下向し給ひき、或は舊古關若^{（註）}に夜を明し、或は黔首の嬰脛に目を暮して、専ら貴賤を度し、偏に緇素を導きて居諸を送り、其のち越後國へ下りましまして聖人の晨暮を重ね給ひし國府に居住し、情往昔の跡を歴覽し、聖人、此處にて幾許の群類を化し給ひつらん、と思召についても亦、當時に至つて門徒も繁昌し、道俗歸伏すると、往の化導と符合せるとと思召て歡喜の思ひ身にあまり、また一は聖人の在世を慕ひつゝ、それより北山烏屋院淨光寺に入り給ひ、猶尊跡を見給ひて感涙を交へ給へり、云々。右の關東北國の巡化も、今日の開けた世と異り、徒歩で深山大澤を跋涉なされたのであるから、其旅路の辛苦艱難は非常なもので、迎傳か駕でない、次の

寺にも行かぬと頑張る、今日の役僧衆などの迎も思ひよらぬことであらう。『山科連署記』の中に

折々御足を取出し候て、御わらじくひ入申すを、みな／＼に御見せ候。我はかやうに辛勞して佛法をひろめ、門徒のために、われは身を捨てたるぞと、仰せられ候ことに候。

と云ふてある、その辛苦想ふべしとぞある、然るに至る處で、懇ろに眞宗の法義を説き、信仰を鼓吹あそばされたからして、關東の頽れた法義も挽回し、北國の信仰も段々と盛になつて來るといふ様な具合で、再興の運が開けかけて、なか／＼盛んな方面へ向つて進む様子が現はれて來た。

今日は漫然として布教と騒ぎ、傳道と囃して、交通の便を利用して彼國此國飛んで回る様であるが、眞實に布教傳道をせんと思ふならば、蓮如上人が實行せられた様に、先づ自ら之を信じて、然る後に人に傳へ、二人三人より固めて、漸次に一村一郷と堅固に根底ある布教をして行くならば、費勞が尠くして効が多いだらうと信ずる、唯どこともなく、風を撒いた様なことをやつて通つたの

では、いくら能辯でも金をかけても、逆も本當の効力を遣して、人を感化することは出来まいと思ふ、そして其固めた處の地方は自身が去つた後も、代つて信仰の鼓吹をやるものを殘して行くことが必要で、若しさうでないとなつて折角固めた地方でも、漸次に信仰の熱がさめるものである、然るに上人は此間の消息をよく御存じになつて、自分で粉骨碎身して佛法が弘通し、法義が再興したならば、屹度其跡を引受けるものを置かれてある、これは獨り宗教の傳道のみでなく、世間一般の實業經營でも、青年の成功策でも、因て以て成し遂げられる唯一の方法であらうと思ふのである。

これに就ては後になつて追々其事實が現はれてくるが、先づ一番初めの金森の如きも、上人が御化導なされた後は、善従が中心となり、追々繁昌になつた模様が見えてゐる、それは叡山の悪僧が大谷殿堂の焼打に飽足らないで、その後金森や堅田の郷に目をつけて、度々攻めに出かけたといふ様なことによりても知らるゝことである、布教師たるもの或は普通一般の人達も、各其仕事に向つた心掛で、これを手本としてやつて貰ひたいのである。

第二節 大谷本山の焼毀

上人が北國の巡化を終つて京都へ歸られた後、長祿元年四十三歳の御時に於て、父御の存如上人が御遷化遊ばされたものであるから、その跡を嗣いで本願寺第八世の住職になられたのである、今日までは自身は眞宗の中心ではなかつた、否實際は眞宗活動の中心であつたが、父御が御存生の間は、まだ何んと云ふても部屋住の身分で、いくらか責任が輕かつたけれども、今は愈々住職として名實共に中心とられた、これからは一層に信徒の教育の門徒の化導に骨を折られた。そこで『領解文』といふ様なものを作つて、信徒の領解の規則、謂はゞ一つの心得書を拵らへられ、寸時の閑もなく、口と筆とで盛に布教をなされることになつた。其結果、追々法義が盛になつたが、然し乍らまだ、盛になつた模様が形體には格別現はれてゐなかつた、然る處、寛正二年の冬、宗祖聖人の二百回忌の法要を、大谷の殿堂で御親修になつた、處が逆師が年來の艱難に打勝て布教なされた結果は、愈々形體に現はれて、佛恩報謝の懇志に驅られて、諸國

の門葉がドシ／＼と大谷へ参詣して來たので、少なからぬ世間の注意を惹いた、即ち之が後になつて叡山の悪僧が殿堂を燬拂つたり、度々の來襲を企てた原因であらうと思ふ。

其後間もなく、禁裏へも我眞宗が斯くばかり盛になつたといふことが傳聞へたと見へて、漸次御歸依遊ばす様になり、御崇仰が深くなつた處からして、日華門を下げ渡され、非常なる名譽を以てその門が當時の本山即ち大谷に移築せられた。斯の如く眞宗の盛大になつたことが形體に現はれたものであるから、當時日本佛教の覇權を揮ふてゐた、叡山の僧徒が嫉妬の心を起すことになつて寛正六年の正月九日、比叡風に京都の市中が寒じきつて、夜寒に思はず眼を覺ますといふ深更に、一山の悪僧百五十人、之が中心となりて其他三百餘人を引率し、合計四百餘人といふ大勢が、テンデに炬火を燃し、薙刀を提げ大刀を帯びて、目深頭巾の山法師相で、大谷殿堂を襲撃して來た。

不意を襲はれたのみか、夜中のことであるから、上を下への大騒動、丁度居合せた僧侶の人々が、御眞影を庭園の植園の中にお隠し申し、蓮如上人を芽茸の

灰小屋へお隠し申した。各自に一生懸命の働きをして、御寶物等も隨意に持ち出して、ヤ、ヤ、騒いでゐるうちに、悪僧共が火を放つたので由緒ある大谷の殿堂も、朝廷から賜はつた日華門も、悉く火の手に包まれて、何ともして見様のない有様とはなつた、折から來合せてゐる下間法眼と佐々木如光は、いでや法敵ござんなれと云ふ大元氣で、煙の中を縦横無盡に駆けまはり、悪僧共と戦つたけれども、多勢に無勢、いくら強い法眼でも、武術鍛練の如光でも、到底逐ひ拂ふことが六ヶ敷いので、大事な御眞影と上人のお伴をして一旦此地を引拂ひ、他日の再興を計らんものと、涙と共に本廟を後に見て、先づ江州の天津に落延びたのである。

殿堂を焼拂ふた悪僧共は、狂ひに狂ふて本廟即ち宗祖聖人のお墓を發かんとした。處が此處に願知といふ人が踏み止まつて、力戦苦闘、奇智を施して漸く其發掘を免れることが出來た。此願知といふ人は越前荒井の生れであると云ふことである。後に至つて上人が特に其功を賞して、今の所謂威狀の様なものを下された乃はち

今度本願寺破滅、山徒之惡黨等、開山聖人御骨所欲堀返、願知依一身之才覺全御番仕、不移轉之條、上古末代之名譽、神妙々々也、爲褒美内木佛令授與也、難有存、子々孫々、御骨所御番可仕者也。

文明八年正月十八日

蓮如御判

として願知に宛てられたものがある。

然るに此惡僧の大谷襲撃の年時に就ては、古來から説が一致してゐない、一つには寛正六年正月九日の出來事であると云ふてゐる、それは即ち『堅田日記』本願寺門跡傳』などの類である。それから一つは文明三年二月十六日であると云ふ説で、是は大谷派の學匠であつた慧空の『叢林集』に記してあるのであるが其源は三河國清澤の願徳寺に残つてゐる記録であると申すことである。今『眞宗法要典據』に相傳の説として載せてあるものを見るに

文明三年の頃、山門の衆徒、眞宗の繁昌を妬み、阿闍梨覺祐これに將となり、大谷を破却せんと五百餘騎にて押寄する。佐々木如光、忠義を抽んで、下間安藝法眼、拔群の働を以て、御眞影を植園にかくしたてまつり、蓮師は灰屋

に忍びかくれ給ひ、敵退いて後、如光の宅に入り給ふ、殘黨これを見て追かけ、長刀を投しかば、師の左足にあたりて、血流る。法眼長刀を奪取り、殘黨を追拂ふ。のち師、如光の宅に在すること三日、其の後、三井寺の扶助によりて、御眞影を近松に移し、奉事し給ふ。

と書いてあるけれども、此文明三年といふ説は、何か外の事と取間違へたものらしい、叡山の僧侶は當時大谷を一度焼打した計りでなく、交々眞宗信徒の集まてゐる處へは、襲撃を企てたものらしい、道西の根據地たる金森や法住の根據地たる堅田の如きも數度の災難を蒙つてゐるらしい、それ等が紛れて文明三年が大谷焼打であるといふ事に傳はつたのであらう、即ち正當なのは寛正六年であると思はれる、眞宗法要典據にも『宗主傳註』を引いて

一に文明三年二月十六日の事となすものは誤也。

としてある、實の處、文明三年は丁度上人が、三井寺を出で、北國を巡化せられた年に當るのである、『御文章』の中には

文明第三初夏中旬の頃より、江州滋賀郡大津、三井寺南廟所邊より、ふと忍

ひ出で、越前加賀處々を、經廻せしめおはんぬ云云
『遺徳記』の中にも

文明第三辛卯の曆、初夏上旬の頃、大津の小坊を忍び出で、北邦に赴き給ふ。

して見ると、大谷退却後から此文明三年までの間に於て、堅田に御住居になつたこと、並に近松にお移りになつた年代がなけらねばならぬから、どうしても大谷の焼打は寛正六年の方が實際に近い様に思はれる、それから又右に引いた典據の文の中に

如光の宅に在すこと三日、其後三井寺の扶助に依て御眞影を近松に移し奉るとあるのは、大谷の焼打を文明三年と見たから、止を得ず、斯う書かねばならぬ様になつたのであらうと思はれる、然るに寛政六年と見る時は、御眞影を近松にお移し申したといふのは、大谷焼打の後餘程間があつてからの事である、といふ譯合になるので、此方が正しいと云ふことは段々後には判ることと思ふ。さて九死に一生を得、御眞影のお伴をして、やつとの事で大津へ移られたので

あるけれども、叡山の方を其儘に捨ておいては、又再び攻打に遇ふとがあるかも知れないといふので、何んとかウマク調和の方法を講じたいものであると、評議に評議を重ねてゐたが、如何な處から漏れて來たのか、叡山の悪僧は、金をやれば、それで調和が出来るのであると云ふことが、判つたのである、即ち今日の所謂賄賂を以て行けば、其れで済むといふ談であるから、佐々木如光とか堅田の法住であるとか云ふ連中が、相談の結果叡山十六谷の坊舎へ、金三千貫を撒き散らすといふことにして、金を醸めた。其集まつた金を、如光が責任者の様になつて、叡山の悪僧に贈つた。それに依て一時、叡山との間が調和せられて、先づ漸く落着ことになつたらしい。

叡山の襲撃即ち大谷本廟の焼拂はれたのは、上人初め弟子信徒の上にあつては、非常に悲嘆せられたこと、察せられる、其時まで殆んど二百年來續いた本廟であつて、それも近來まで微々として振はなかつたのが、上人が布教に御盡しなされた結果として、信徒も集まり盛大に赴くといふ状態に移つた、眞ッ先に當つて、一炬焦土となるといふ有様であつたから、實に慷慨悲憤に絶えなかつた

ことであらうと思はれる、然し「不幸即ち幸」と云ふ諺もある通り、此大谷焼打の大々不幸が、其後に至つて上人の爲に、眞宗の爲めに、大いなる幸運を開き出す基となつたのである、それは如何なる譯であるかと云へば、眞宗即ち本願寺の中心が一轉變を來すべき原因をなしたのである。是までは申す迄もなく、大谷が根據地で京都が其中心であつたのであるが、逆縁必しも逆縁でなく、反て眞宗中興の大動機を與へることになつた。

第三節 地方中心の布教

京都は寛正から以後、戦亂が打續いて、其翌年が彼の應仁元年であつて、以後十餘年間、花の都の京都が、修羅戦争の巷となつて、荒れに荒れた時である。して見れば斯様な大戦亂の中では、到底、布教傳道が覺束ないから、假令大谷の殿堂が焼けずに在つた處が、矢張他の處へ難を避けねばならぬのである。當時は京都の諸本山悉くが、遠國近國に亂を避けたもので、暫くの間、京都を中心としてゐることは出来難い場合であつたのである。

然るに若し我大谷の殿堂が焼打に合はなかつたならば、一時は一寸變亂を避けても、宏壯な殿堂を後に見て、手易く京都中心を他に移すことが出来るものでないのは、人情の常である。處が大谷の焼打に合ふた後、間もなく京都が修羅の巷となつたので、暫時の立退といふよりも、寧ろ末永く地方に教化を施くべしであるといふ考からして遂に布教の中心を地方に移すことに決心せられた。斯の如く中心を餘所に移すことになりたから、布教に新清氣を發し、萬事が活潑にやられることになつて來たのである。そこで大谷の焼打は眞宗の將來に向つて考へて見ると、此上もない幸運な出來事で、蓮如上人の眞宗再興に就ては、目出たい運命を造り出したものである。

凡て此中心點の移動といふとは、極めて大切なものであつて、或場合には衰滅の基となることもあるが、又他の場合に於ては、新生命を作り出す動機となるもので、古來から宗教の新生命を吹き出して來るのは、多く中心點を轉じたのが基となつてゐる様である。是は強ち宗教のみでなく、世間の萬般悉く其通りで、彼の奈良朝の政治が非常なる腐敗をして、施すべき匡正の策もなく、なんとも

して見様の無い時に桓武天皇が快刀亂麻を断つが如く、平安に都を遷し、萬事に清新の機運を興へられて遂に奈良朝の弊政を一變せられた。又近くは明治維新の際に於ても、舊來の制度習慣では、到底世界列國に班を伍することが出来難い、若し舊都即ち京都に於て、新しき良制度良風俗を施した處が、何時の間にやら、舊來のものに退化せられ、又は新舊の衝突杯が起つて、清新な氣運を發揮することが出来ない、そこで新制度を施さんとするには是非共新天地を擇ばねばならない、因て断然と京都を引拂ふて、東京に帝都を遷されたのである。即ち政事の中心を東京に移されたのが今日の大日本帝國ある原因であらうと思ふ。斯の如きは個人に當て拵めて考へて見ても同様であるが、宗教も矢張り其の通りで、宗教に自覺を興へ、改善を施し、新生命を發揮せんと思ふならば、否な少なくとも今日の如き佛教の腐敗墮落を救ひ、社會を導びき活動せんと欲するならば此中心點の移動といふことに就ては大いに熟慮して見ねばならんことであらうと思ふ。中心を移すといふことになれば、第一は建物が新になると、従つて形式までが新になり、一般信徒の信念が習慣の惰力を去つて、建全なものど

變り、其生命が新たになつて來るのである、元氣が出る、活潑になる、其結果は盛觀舊に倍して社會指導の大任を遂げ得る様になるのである、勿論今直ちに今日の本願寺を東京に移せとは云はないが、そこは能く考慮して見ねばならぬ大問題であらう。

さて此大谷殿堂焼打後、上人は如何なされたのであるかと云ふに、其後越前へ下向せられるまでの間の歴史は、種々な説があつてどれが果して眞に近いやら、一寸判断しにくるのである。之に就て何か世間に確たる史料が存して居るかも知らぬが、今一々考證する暇がないから、傳説の儘を話すことにしやう。一説によれば、大谷焼打後、直に大津へ避難せられたと云ひ、又一説には佐々木如光の館が京都にあつて、御眞影も上人も共に難を避けられて、三日の間滞留せられ、次で江州金森の道西の宅へ移られた、時に再び叡山の襲撃があつて、長居かなはず、堅田に移り、更に大津へ戻つて、近松へ歸寓遊され、其近松から越前へ下向せられたといふてゐる。『堅田日記』を見ると

寛正六年正月中旬頃、京都室町に御座在つて、今法寺へお移りあり、其後壬

生へかへられ、應仁元年の頃京亂に、栗本郡安養寺麴坊の道場へ御下向有つて、七十日許り生身の御開山御眞影様御逗留なり、さて赤井御うしろさまに負奉り、御浦より御船にめされ、應仁元年二月中旬の頃、當處、下馬場、唐崎の濱へは御船をつけ申され、馬場本福寺道場へ御入御おはしまし、其の年の霜月二十一日夜より、蓮如様御下向有て、七晝夜の御佛事ゆるくと御いなみ在して、御參詣の人数いくらと申限なし。

此説は前に挙げた二説の中、前説と連絡がつくのではないかと思はれる。大谷夜襲の時、一旦大津に避難せられたけれども、京都中心の思想がまだ除かない處から、又直に京都に引返されたものであらう。けれども翌應仁元年の亂で、到底京都に居ることも叶はず、遂に江州の栗本郡安養寺麴坊へ移られたものであらう、本廟までも焼拂はれて、京都の地には最早思ひ置くことが更らに無いとなつて見れば、戦亂の巷に布教せんよりも、山間僻地の平和な處に先づ教を垂れんと、断然地方中心の考になられたものであらうと思はれる。本廟の焼失が上人の布教の爲めに、反て幸運であると思ふことは、今日お互が

回想して云ふばかりでなく、當時已に一面にはさうゆう思想があつたらしい。それは餘り確な書物ではないけれども『蓮如上人實傳』とか云ふ極通俗的なものがあるが、今其中に書いてある意味を申せば、上人が大谷から落ち延びて大津へ避難せらるゝ際に、佐々木如光が大津街道で駕に乗つて通る者に出遇つた時、駕中の人が大聲あげて「本願本も今度叡山の爲に焼打に遇うたさうぢやが、實にお芽出たいことである……」と談してゐたので、如光が之を聞て本願寺を惡様に云ふ點から考へると、多分叡山の徒黨であらうと思ふて之を呼止め「ナニ他人の難義を目出たいとは何のことぢや、聞捨ならぬ」と怒鳴りつけると、駕中の人は周章です狼狽へず、「今度の焼打は實にお目出たい次第で、此焼打に依て、蓮如は地方へ出て、邊鄙の人を教導するであらう、して見ると本願寺の焼打は非常に目出たいこと、云はねばならぬ」と云ふかと思つて見ると諸共、消え失せたといふ事が書てある。されば其當時にも大谷の焼打は布教の中心が地方に移る動機となり却て眞宗興隆の縁となるの考を持って居つたらしい。是は果して何々神の御化現であつたとか、何とか云ふ小説むきの譚であるか、

併し是にて當時に於ける故る一面の事情を知ることが出来ると思はれる。即ち其當時に於て既に大谷の殿堂が焼けたのは、眞宗繁昌の爲めに反つて好い、丁度桐の木を切つた様なもので、其切口から益々大きな芽が出るものである、と云ふ思想が皆の人の胸中にあつたらしいが、果して其通り蓮如上人の布教は是から以後著しく活潑になつて來た。

さて其後江州の堅田に移られたけれども、叡山が程近いところから容易に御布教せらるゝことが出来難かつたらしい、早速寺務を長男の順如様にお任せなされて、自身は東北諸州の巡化に出かけられたが、間もなくお歸りなつた様である、文明元年の春になると、叡山から又々來襲があるといふ噂があつたので、弟子や信徒の驚きは一方ならず、種々の評議を凝した處が、堅田の法住の弟子に濱名太郎左衛門こと、法名覺道といふものがあつて、自身の邸内に極小さなものであつたけれども、一つの堂舎を建立して、御眞影をお移し申上げたいと願出でた、仍て其請を容れて同年二月十二日の夜、陰かに傳馬船に打乗つて、堅田の浦から大津へ渡り、濱名の立てた小さな堂舎に眞影を御安置申し、蓮師も共

に移られ、法住が何呉れとなく御給仕申してゐた。處がこゝに濱名太郎左衛門が、三井寺の滿徳院といふ人と頗る入魂な間柄であつた關係からして法住の家の寶物であつた「葵の大刀」一振りを滿徳院へ進物にし、三井寺へも賄賂的なものを贈つて程よく取入れ、三井寺の南別所を借受ける約束が成り立ち、竹箴を开拓して、一字の堂舎を建立することになつた。幸に此三井寺と、叡山とは年來、犬猿も雷ならぬ間柄で、非常な壓轢をして、互に勢力を養う處があつたからして、流石の叡山も三井寺を憚つて、威壓は兎も角、決して來襲は企てなかつた、是れが今日の近松別院顯證寺である。此の近松に居住せられた間に、屢河内邊へ行化せられたもので、今猶ほ久寶寺に其由跡が残つてゐる。斯の如く彼地此地と流浪して歩かれたけれども、其結果は反て法義が引立つて、益々繁昌して來た。そこで叡山の惡僧も南別所へは三井寺を憚つて、襲撃して來なかつたけれども、上人の布教地として最も盛んな、堅田や金森へは屢々やつて來たらしい。然し乍ら三井寺南別所に於ても、直接に山徒の來襲こそなかれ、間接の壓迫は、直接の事件が無いだけ彌ましに激しく、到底此地に長く留

まで布教することが出来ないので、止むなく文明三年の四月に北國へ下向せらるゝことになつた、此の途次西興次郎等がお伴をして、堅田の郷西浦の法西房へお泊りになつた時、一同が名残りを惜んで、此地で御坊を建立申上るから萬望お止りを願ひたいものであると申上げた時、上人が扇を以て、叡山の方を指して、「あれが近いからな」と仰せられたとのことである。此事から推し考へて見ても、如何に叡山の壓迫が強かつたか、判るであらうと思はれる。

イ 吉崎建立

文明三年四月上旬、三井寺の南別所を後に見て、北國の巡化に出立せられた、是がそもく、真宗再興の出来る基である。『遺徳記』の中にも此下向に關して、

文明第三の御下向は、偏に真宗繁昌の先蹤なり。
と云ふてある。居るに堪へ兼ての北國御下向、實に不幸中の不幸の如く、叡山の惡僧共からは、ザ、見よがしに云はれたけれども、是が反て真宗の今日ある素因をなしたとは、忍ぶ可らざるにも忍び、堪ゆ可らざるも堪へて、信する處を行ふて道を踏めば必らずや其處に光明路があるのである。又如何なる迫害や、

不幸失敗に遭遇しても、信する處を進んで行くならば、其迫害や不幸に數倍した好果が得られるものである、決して事の挫折する毎に、元氣を消耗さすものでない、落日の後には必ず旭日昇天の快があるといふ事を蓮師の此迫害から學ぶことが出来ると思ふ。

初めは越前の足羽郡北野莊に、暫時御滞在になつて、藤島の超證寺荒川の興行寺、和田の本覺寺等に於て、日々法筵を設けられ、參詣者が非常にあつた。それから加賀を御巡化なされ、七月に至つて、越前の吉崎の地を卜して、其處に堂宇を建立遊され、布教の本場をお構へなされた。時の國守朝倉敏景が深く御歸依申して、堂宇建立に非常な御加勢を申上げ、加賀、越中の信徒まで、遠路を遠しとせずして御助力申上げた。恰も彼の周の文王が靈臺を作つた時の様に、庶民子來すといふ有様であつたから、工事の進みも早く、吉崎の山中が見る間に開かれて堂宇が輪奐として松林の間に聳え、狐狼の咆哮に引換て、朝夕鳴り渡る鐘の響に、法音が流れ流れて、邊鄙の一寒村は、將に極樂國土と化せんとするの觀をなした。

敏景の夫人も翌年に至つて初つて參詣して、親しく蓮師の御教化を蒙り、後非常な篤信者になつて、夫婦共に崇敬歸依の念篤く、外護の力をお盡し申した。國守が既に其通りであるから、其下に在る老若男女は、草の風に靡くが如く、加賀、能登、越中等、遠國近國の參詣者が日に月に殖えるといふ有様で、餘程繁昌の運に向つて來た。而して斯の如く、國守初め凡ての人々が、非常な御歸依をして來ると云ふのは、全く上人の御教化が、時機に適して、強ち古來の習慣情力に倚らず、而も懇切にやられたからで、決して偶然にそうゆう歸服を得られたのでない。今日の所謂布教なる者を見るに、多くは自ら何等の得る處のない者が、唯言葉に艶をつけて一時の落語的の感興を興へるに過ぎぬ、之では如何ほど汗水たらしても駄目な話で、世の中は新聞の記事の様に、毎日〱變化し推移し、進歩して行く者であるから、其處をよく噛み別けて、懇切に本易に而も熱心にやらねばならぬ是は宗教のみの談でなく政治、文藝、實業等何でも、能く時機を見るの明を欠いではならぬ。眞宗再興の源因、蓮師布教の眞髓は、此邊の意味合を説明し得て餘りがあると思はれる。當時の御消息即ち「御

文章』第一帖目の文明五年二月八日の御文を見ると、如何に親切に御導なされたかを知ることが出来る。

抑も當年より、加賀、能登、越中兩三ヶ國の間より道俗男女群集をなして、此吉崎の山中に參詣せらるゝ面々の心中、如何かと心もとなく候。其故は當流の趣は、此度極樂に往生すべきことよりは、他力の信心を得たる故なり。然れども此一流の中に於て、しか〱と其信心のすがたをも得たる人これ少なし、斯くの如きの輩は、いかでか、報土の往生を遂ぐべきや、一大事と云ふは是なり。幸に五里十里の遠路をしのみ、此雪の中に參詣の志は如何様に心得られたる心中ぞや、千萬心もとなき次第なり、所詮以前はいか様の心中にてありと云ふとも、之より後は心中に心得おかるべき次第を、詳しく申すべし云云

斯の如く信徒に對して懇ろなるのみならず、法門の説方と云ひ、又宗旨の形式と云ひ、頗る當時の事情に適する様にやられたもので、今其一例を擧げるなら、彼の正信念佛偈の勤行などいふものも、矢張り此時に出來たことで、文明五年

の三月に正信偈を版に起して、信徒に配布せられたと云ふことである。此正信偈を朝夕讀誦することは、今の多くの人は、眞宗創まつて以來の式であるかの様に思ふてゐるものも有らうが上人が、吉崎にお出になるまでは、本願寺でも朝暮の勤行は、善導大師の、六時禮讃を拜讀したものである。處が吉崎にお出になつて見ると、田舎には一層愚なものが多く、如何しても六時禮讃を勤めさせることが出来ないのみならず、時勢は恰も戦亂の折柄であるから、僧侶でも本式をお勤め申すことが頗る困難である。そこで誰でも讀誦することが出来て、何時でも勤められる様な、時に應じ機に契ふたものに改めなければならぬ、簡易な勤式を設けられたのが、即ち正信偈六首引である、已後はが常式となつて、今日に至つたものであるが、而も時の宜しきに従つて勤め方が異つてゐる、極暑い時は略する、忙しい時は省くと云ふ具合に、長短繁簡、如何なる時にでも適する様にせられたらしい。『實悟記』の中に

當流朝暮の勤行の念佛に、和贊六首を加へて、御申候ことは、近代のことにて候。乃至、文明の初め頃まで、朝暮の勤行には六時禮讃を申してはべりし

なり、然るに蓮如上人、越前吉崎に御下向候ては、念佛に六首の御沙汰候ひしを承り候てより以來、六時禮讃をやめ、當時の六首和贊を稽古致し、瑞泉寺の御堂衆も申し侍べり候ひしことなり。

と云ふて有る。之に依て見ても、時勢と云ふものを好く見判けて、何事でも人心に適合する様に、巧に改善し進歩して行かねばならぬものである。昨日の我は今日の我でなく、昨の社會は今の社會でない、常に世相は轉變してゐる。然るに若し轉變しないもので有るならば、飽まで舊態を保守して、修養も進歩も必要は無からう。けれども流水の混々として止むなきが如く、人心に於ても社會に於ても、無始無終に變化してゐるから、今日に處せんと欲せば、先づ昨日に於て自ら修養し、改善しつゝ其日を送らねばならぬ。又明日にうまく功を收め、事を成さんと思ふなら、今日即刻から修養を怠つてはならぬ。一身の上にあつて既にそうである如く社會の政治、教育、宗教等悉くが、矢張り日々修養して、長を採つて短を補ひ、惡を捨て、善に移る様にせねばならぬ。そうすると何時でも、生氣のある元氣のある、感化力のあるものにして、社會を導くこと

が出来るものである。

蓮師が時勢に應じ機に處して、朝夕の勤行を平易にし簡便にして、一般のものに感化の行渡る様にせられたとは、過度時代に惱んでゐる、現今の佛教徒たるものは、大いに注意を要すべき事柄であらうと思はれる。人間は元來、ある程度までの保守は必用なものである。恰も事業を成すのに、資金を大切に勞力を大事に、之を固守して、毫も缺損せしめてはならぬ、けれども只之を固守するばかりを知つて、更らに有用に種々に變形して、之を用ゆることを知らなかつたならば、到底事業は舉らないのみならず、遂には其資金にまで缺損を生ずる様になつて来る依て之を保守すると共に、更らに有用に用ゐねばならぬ。お互に舊慣を守ると共に、更らに社會に順應して、進歩して行く様に、注意を要すると思ふ。

斯様な次第で、吉崎建立から僅か二三年の間に於て、遠近の信徒が此吉崎山へ參詣する様になつて、彌々繁昌の勢が現はれて來た。然るに月に叢雲、花には嵐と云ふ如く、他宗他門の人々からして其繁昌を妬やんで、上人の御布教を妨

げやうとする徴候が見えて來た。と云ふものは、上人の信徒の中に於ても、多人數のことであるから、世人の誹謗を招くものが一人も無いとは限られない、中には信實の信心の無い者も多く、善くない行爲をやつたものであらう。處が鶉の目、鷹の目で、上人の方に落度あれかしと願ふてゐた、他門の人々が、右の善くない行爲を見て、誹謗することになつたから兎も角、その猜疑心を避ける必用が起つて來た。そこで文明四年の正月に及んで餘り澤山な人が集つて來ない様にと、諸人の出入を禁せられた。けれどもそんな事を聞きいれる者がない。信仰上の事であるから、禁せらるれば禁せられる程、隨喜渴仰の涙と共に參詣して來る、之では折角他門の嫉妬を避けやうとして、反つて増した様なものであると、文明五年の九月に及んで、一通の御文を作つて、餘りに人目にたつ様なことはして呉れぬ様にと、懇々と諭された。それが『御文章』一帖目の第八通である。

文明第三初夏上旬の頃より、江州滋賀郡大津三井寺南別所邊より、なにとなくふと忍び出で、越前加賀所々を徑徊せしめおはんぬ。依て當國細呂木郷

の内吉崎といふ此在所、すぐれて面白きあひだ、年來狐狼のすみなれし此山中を引平げて、七月廿七日より、かたの如く一字を建立して、昨日今日とすぎゆくほどに、はや三年の春秋を送りけり。さる程に、道俗男女群集せしむと雖も、更らに何へんともなき體なる間、當年より諸人の出入をとひむる心は、此在所に居住せしむる根元は、何事ぞなれば、抑も人界の生を受けて、値ひ難き佛法に既にあへる身が、徒らに空しく捺落に沈まんは、誠に以て淺間敷ことにはあらずや。然る間、念佛の信心を決定して、極樂の往生を遂げんと思はざらん人々は、何しに此在所へ來住せんことかなふ可からざる由の成敗を加へおはんぬ。是れ偏に名聞利養を本とせず、唯後生菩提をことゝするが故なり、然ば見聞の諸人、偏執をなすこと勿れ。あなかしこ。

處が信仰上の事は妙なもので、押へつけければ押へ付る程、はね上らうとして、論せばさとす程、禁すれば禁する程、どんく參詣して來る、丁度御維新前に、鹿兒島で眞宗が隠然として盛で有つた様なものである。そこで禁すると云ふても、只「來るなく」と云ふだけでは何の役にも立たぬから、具體的にア、して

はならぬコ、してはいかぬと、論すより外に仕方が無い。

諸宗から妬まれるのは、當方が繁昌するからで、先方が悪いのでは有るが、然し乍ら當方の信徒の中でも、他宗に對して誹謗するものがある、それが他宗他門の口實となつて、益々強く妬まれ、妨害を蒙ることが烈しくなる。そこで上人は又之を戒めて、他宗他門を聖道門とか外道とか云ふて誹謗せぬ様に注意せられた『御文章』第一帖目の第十四通目に、

抑も當流念佛者の中に於て、諸法を誹謗すべからずまづ越中加賀ならば立山、白山そのほか諸山寺なり。越前ならば平泉寺、豊原寺等なり。されば經にはすでに唯除五逆誹謗正法ところ、これを戒しめられたり。之によりて念佛者は殊に諸宗を誹謗すべからざるものなり。また聖道諸宗の學者達も、あながちに念佛者を誹すべからずと見えたり。そのいはれは經釋ともに其文これ多しと雖、まづ八宗の祖師龍樹菩薩の智度論に、深くこれを戒しめられたり。その文に曰く自法愛染故、毀訾他人法、雖持戒行人、不免獄苦といへり。かくの如くの論判分明なる時はいづれも佛説なり、あやまりて謗することなか

れ、これみな一宗々々のことなれば、我がたのまぬばかりにてこそあるべけれ、ことさら當流のなかにおいて、何の分別もなきもの、他宗を誹ること勿體なき次第なりあひかまへて、一所の坊主分たる人はこの成敗をかたぐいたすべきものなり。あなかしこく。

斯の如く度々信徒に向つて、諭示があつた。今日の佛教徒なども猥りに自讃毀他をせざるように此等の點に注意して貰ひたい

然るに其年の十一月に至つて、又法規十一條を設けて取締をせられた、その文は『帖外の御文章』に載せてある。即ち

真宗行者の中に於て、停止すべき仔細の事。

- 一、諸神並びに佛菩薩等を輕しむ可らざること。
- 一、諸法諸宗を全く誹謗す可らざること。
- 一、我宗の振舞を以て、他宗に對して難す可らざること。
- 一、物忌の事、佛法の方に就てこれ無しと雖、他宗並に公方に對しては難く忌むべきのこと。

一、本宗に於て相承もなき名言を以て專に佛法贊嘆しかる可らざること。

一、念佛に於ては、國守護地頭を專にすべく、輕んず可らざること。

一、無智の身を以て他宗に對し、我意に任せて我宗の法義、その憚りなく贊嘆せしむること、然る可らざること。

一、自身に於て未だ安心決定せず、人の言を聞き信心法門贊嘆然る可らざること。

一、念佛會合の時、鳥獸を食う可らざること。

一、念佛集會の日、酒に於て本性を失ふ、飲む可らざること。

一、念佛者の中に於て、擅に博奕停止すべきこと。

右十一ヶ條、此制法の義に背くに於ては、難く衆中退出すべきものなり、仍て制法條如件。

と嚴重に申渡され、更に文明六年の正月十一日に、法規三條を設けられた、その文は

- 一、諸法諸宗共に之を誹謗す可らず。

一、諸神諸佛を輕しむべからず。
一、信心をとらしめて、報土往生を遂ぐべきこと。

右此三ヶ條の旨を守つて、深く心底にたくわえて、これを以て本とせざらん人々に於ては、此當山へ出入を停止すべきものなり。

抑もさんぬる文明第三の曆、中夏の頃より華洛を出で、同年七月下旬の頃已に此當山の風波荒き在所に草庵を占めて、この四ヶ年の間居住せしむる根元は、別の仔細に非ず、此三ヶ條のすがたを以て、彼の北國中に於て、當流の信心決定の人を、同じく一味の安心になさんが爲の故に、今日今時まで堪忍せしむるところなり、仍て此趣を以て、之を信用せば、誠に此年月の在國の本意たるべきものなり。あなかしこく。

斯の如く屢々訓示を下し、或は法規を設けて、信徒の不心得を戒飾せられ、濫りに吉崎へ出入しない様にして、他宗他派の嫉妬を昂めない様に、口實となるべき行や、舉動を避けられたのみならず、其他の總ての方面に向つて、餘程の警戒を拂はれた。それで神道に對しても、本地垂跡説を採用して彼を敵視しな

い様に否懐柔する策をとられた。『御文章』第二帖目第二通の如きはそれである。

神明と申すは、それ佛法に於て信もなき衆生の空しく地獄に落ちんことを悲しみ思召して、これをなんとしても救はんが爲めに假りに神と現はれて、いさゝかなる縁を以て、それをたよりとして、遂に佛法にすゝめ入れしめん爲の方便に、神とは現はれ給ふなり云云。

それから當時戦亂の爲に人氣が殺伐になつて、秩序が亂れたから、上の命令が滑に行渡らない、従て下の者が年貢や賦役を通れる工夫をして、社會がうまく治まらない、そこで治者の方の迷惑は、一通りでなかつたのである。仍てそれ等に對しても信徒に諭示せられて

守護地頭方に向きても、我は信心を得たりといひて、粗略の義なく、いよいよ公事を全くすべし。

等と教へられて、人間としての行爲、人民としての義務、社會に對しての務めを怠らない様に、充分なる御盡力をなされて、佛法と社會が個々別々にならぬ様、佛法、王法、世法と、一つも缺けては相成らぬものであると、懇ろに、佛

法を喜ぶにつけても、其行儀作法に注意せねばならぬと仰せられた。これ等の事を考へて見ると、上人が北國御行化の間に於て、如何に法を傳へ教を弘めんかと、苦辛焦慮遊ばされたか、判るのであるが、これは上人當時の事のみでなく、今日に於ても、右に擧げた制法中にある様な弊害が、佛教中に澤山ある様である。然れば今日の佛教家、別して眞宗の信者は、矢張り蓮師が與へられた注意の如き注意を以て世に處し、且つ布教せねばならぬ、御文章でも御經でも盲目讀に讀んでは、功德になるものでない。注意してゐないと、見ても見へず、聞いても聞えるものでない。朝夕拜讀する御文章でも御經でも、佛祖の御心を心として味はひ、自らの行儀作法を善に改めて行かねばならぬ。以上は外の方面に對しての注意であつたが、そればかりでなく、當時は又内に向つても注意すべきことが澤山あつた。それは越前に秘事法門なるものがあつて、十劫秘事とか、善知識だのみとか、其他いろ／＼な異安心が行はれてゐたそこで此異安心を打捨て、おくと、外からはたとひ難問題が起らないでも、内の法門が亂れて仕舞ふことになる、そうなれば折角眞宗再興を志ざされても、

何の役に立たないことになるのであるから、親鸞聖人の一流を再興するには、是非此秘事法門を打破らねばならぬ、けれども荒らだて、之を攻撃することは上人の御本意でない。仍で弟子や信徒が斯る邪義に陥らぬ様に、懇々と注意をなされた。要するに外に向つては、王法世法を忽にするな、内に向つては秘事に陥るな、修養を怠るなと、内と外にとの兩面の敵を防いで、一方ならぬ苦勞をさせられた、眞宗再興と一口に云へば譯のない談であるが、全く蓮師の苦辛の結果である。

然る處、文明六年の六月廿八日に至つて、吉崎の堂宇が火災に罹つた。それは如何なる譯であつたかと云へば、當時の様子を『帖外の御文章』に

當年文明第六、三月二十八日酉の刻と覺えしに、南大門の多屋より火事出でて、北の大門にうつりて焼けし程に、以上南北の多屋は九つなり、本坊を加へて其數十なり、南風にまかせて、焼けし程に、時の間に灰燼となれる、誠に淺間しといふべき、なか／＼言の葉もなかりけり。それ人間は何事もはやこれなり、殊に三界無安猶如火宅といへるも、今こそ身には知られたり云云

之は實に不意の失火で、折柄南風が激しく吹いて煽りたてたから、みすく一山焦土となつて仕舞た。彼の本光坊了顯がお聖教を火中に探したのは此時である。サー出火ぢやと云ふや否や、御本尊を初め大概なものは、持ち出したけれども、上人の御居間の机の上に、親鸞聖人御眞筆の御聖教であるとして傳はつてゐる、御本典の證の巻が一冊取り残されてゐると云ふことに氣がついて、上人は非常に御心配をなされたけれども、如何せん最早煙と火で一面に包まれてゐる。兎やせん角やせんと案じ煩らうて居られた時にお弟子中に本光了顯といふものがゐて自ら進んで炎の中に飛入り、上人のお居間を探した處が、案の通り残つてゐたけれども火は彌々激しくなつて、逆もお聖教を以て火炎の中を潜つて出ることは叶はない、自身は折角御聖教は手にしたけれども、つまり焼死するより外に仕方が無いのである、あれ煙が火になつた、炎になつた、嗚呼、如何したら此お聖教を全うして上人の御心を安め、且つは佛祖の御恩を報へることが出来るであらうかと、煙に咽び火に包まれて思ひ惱んだけれども最早如何ともすることが出来なかつたから、豫て用意の懐劍を取り出しザクと突刺し

て腹を十文字に切り開き大切なお聖教を臍腑の中へ押入れて、其儘火炎の中に斃れて仕舞ふた。暫くして火が鎮まつてから、了顯の様子如何にと探して見れば哀れや火に焼け爛れてまことに見るかげもない有様、實に氣の毒なことをした、可愛想であると、仰向にして見ると腹の中に妙なものが有る、これはと驚いて出して見ると、血汐に塗れたお聖教であつたのである。今日に到るまで本願寺の文庫に納めてある、血痕班々として油がういてゐる様な、肉付腹ごもりのお聖教は即ちこれである。

さて其火難の後、上人は如何遊ばされたかと云ふに、門の外に在つた多屋だけは難を免れたから、取りあへず御本尊を安置し、上人も暫くお住居なされた。然る間に諸國の門徒が、だんく集つて来て、四月上旬には假屋が出来上つてそれにお移りになり、其後、加賀、越中兩國を巡化せられ、加賀國二俣の本泉寺で暫く御滞留、程なく吉崎へお歸りになつた。

□ 吉崎の退去

文明七年の八月に至つて、またく不意の大事件が出来して、其爲に上人は佛

法有縁の地として居住をトせられた、越前の吉崎を去られねばならぬことになつた勿論その以前から既に退去の御思召はわつたのであるが、信徒が懇にお止め申したので、決行せられなかつたが今度といふ今度は、如何に信徒がお止め申しても事情が許さぬことになつたから、直ちに退去せられることになつたのである。さてその不意の事件とは、如何なる事であるかと云ふに、その事を談すに就ては少し以前に遡らねばならぬ。

北國の地には叡山だけの大勢力のある反對者は無かつたけれども、而も豊原寺と平泉寺とか云ふ様な、他宗の大地である處の、小叡山が澤山あつて、前でも述べた様に、是等から誹謗や妨害を加へられぬ様に、信徒へ對しても度々御注意をなされた。

處が世の中の事は、多く意想外な處から發生して來るもので、此方を抑へれば彼方が揚る習ひである。上人が注意警戒を加へられた方面は、格別な變動もなかつたが、反て他宗でない、同じ眞宗部内からして、敵意を挿んで起つたものがある。然らば其敵意は如何な處が導火線となつたのであるかと云ふに、高川

派専修寺の門徒と上人の門徒は、同じ眞宗に流を汲んでゐるから、法義の席に此兩門徒が常に集まつてゐた、すると各自慢話が出て、己れの本山は血脉相承である、イヤ己れの本山は法脈相承である、故に親鸞聖人の正統は己れの方である、とか云ふ様な議論が起つた、それが兩派の間に敵意を挿む根本となつて來た。然る處、越前の國守は朝倉敏景であつて、上人へ非常に御歸依申して、吉崎の土地まで献上した人であるが、當時加賀の國守をしてゐたのは富樫一族五家に別かれてゐたが、何れ劣らぬ信佛家で初の程は上人へ御歸依申してゐた、處が加賀國には専修寺の門徒が澤山ゐて。國守の富樫氏は自分等の味方である、若しも本願寺門徒と戦を構へる時になると、屹度自分等の味方をして呉れることゝ信じてゐた。然るに富樫氏は前に述べた通り、蓮如上人へ非常に御歸依申してゐたから、文明五年八月十五日に、加賀の専修寺門徒が一擧して、川崎の専稱寺に火を放つて焼打をなし、勢に乗じて吉崎の御坊へ攻め寄せんと、竹槍蓆旗の陣立勇ましく、やつて行かんとする時に、國守の富樫政親が鎮撫の急使を遣はして、お前達は百姓風情の身を以て、本願寺の蓮如上人へ手向ふと

は、大逆無道なり、若し早く引去らずは、國守富樫之介政親がお相手申さんと云ふたので、百姓共の驚き一方ならず、蜘蛛の子を散らす如く、逃げ去つて先づ無事に終つた。

然る處、其後に至つて、富樫之介が専修寺の方に組して、本願寺方に敵對をする様になつた、其れは如何なる譯であるかと云へば、富樫氏と専修寺とは親戚の間柄で、政親の父に二男二女があつた。長男が政親で二男の幸千代而して次女が専修寺に嫁して居た斯の如く親戚の關係からして勢ひ富樫氏が専修寺へ味方をする様になつたものらしい、そこで加賀國の兩派の門徒が互に訴事をして、裁判を仰ぐといふ時になると、何時でも専修寺方のものに勝を與へる、不正亂暴な裁判を下した。仍て本願寺方の門徒は大に憤つて、あの富樫こそ法敵である、自からの國守に向つて敵意を挿さむ様になり、將に一揆も企てまじき勢となつたので、富樫氏もさてこそと勢を集めた。當時加賀に於ける本願寺の御坊は金澤にあつて、今の金澤別院はそれが變遷して來たものである。先きんずれば人を制すと云ふ如く、富樫之介は本願寺門徒が専修寺方に反抗し

且つ富樫之介を打滅さんが爲めに、一揆を企てるといふことを見込んで、直ちに何の備へもない、金澤の本願寺御坊へ攻め寄せ、殿堂を破毀して仕舞た、是は文明六年三月下旬の出來事である。此後といふものは雙方常に戦争をして、同年の七月から十月までは、引續いて戦つてゐた。此事は佐藤巖英君が二三年前に、金澤にゐて、『金澤別院沿革史』といふものを書いた中に、『北國太平記』、『三州誌』等を引き、種々考證して辯じてゐる、今それに依て大體を述べて見やうと思ふ。

由來、國學者の多くは佛教を夷狄の教として斥け、無暗に神道を説き立て、佛教徒の爲た事は、悪し様に傳へて、何か曖昧な事件か又は佛教徒が僅かに缺點を暴露した事でもあると、針小棒大に之を歴史に傳へて居る。勿論同一事實でも異つた思想の人に依て發表せられる時には相異なるもので、同じ日光でも、赤い硝子を透して照らすと赤くなり、青い硝子を透すと青くなる様なものであるから、多少自己の見解や性癖が附着するのは、強ち咎むべき事ではない、けれども、苟しくも一國の歴史に記録して、後昆に教訓を垂れ、盛衰興亡の跡や、

功罪の事柄を知らしめんと思ふならば、烏は黒く鷺は白いと、其度合の精粗は別として、全然間違つた事のない様に、如何に異主義の者の事蹟であるからといふても、烏は白し鷺は黒しと、眞反對な事を書かない様に努めねばならぬ。然るに維新前頃の所謂國學者なるものは、此重大なる責任を忘れ、異主義の者の事柄は、飽迄これを悪様に傳へておる。即ち我蓮如上人の事蹟などは、其著しいものであらうと思ふ、彼等の云ふ處に由て觀ると、蓮如上人は邪智奸佞、辯才に長じて浮浪の徒を集めて兵を起し、北越の地を横領したと、小學校や中學校の教科書にまで、堂々記載してあつた、勿論事件の結果は加能越の三ヶ國を本願寺の領有の様にしたかも知れぬけれども、それは事件の進行に伴ふて意想外な結果であつて、徒らに宗教に事寄せて、俗權を揮はんが爲めに北越の地に一向一揆が起つたのではない。それに何ぞや、自ら地を略せんがために、王侯に街はんが爲めに、無智の百姓を煽て、争亂を起さしたと、宗教を教育から排斥する爲に事實を曲記して、後輩を誤らんとするのは、實に怪しからんことであると思ふ。蓮如上人に於ては、唯念佛弘まれかし、社會平和なれど事多い

都の地を避けて、態々北陸の地に竹杖草鞋の行化をなされ、飽まで宗教を以て生命となされたのである。今日までの史家の見解は、甚しい誤謬に陥つたものであると云はねばならぬ。

さて其専修寺と本願寺との一揆騒動は、重に加賀であつて、多少其餘波が越中や能登にも及んだけれども、まだ越前吉崎の御坊には、直接敵方の一揆が押し寄せては來なかつた、然し乍ら假令、隣國での騒動であつても自派と他派の門徒が鏑を削つて居る以上は、上人も吉崎にゐては事面倒であるから、暫時退去なさる御所存であつたが、急に争亂の渦中になるのでもなく、又信徒が是非御滞留遊ばす様にと、手を盡してお止め申したから、一日延びに延びてゐた處が文明七年八月に至つて、不意の大事件が起つて來た其れは如何なる事であるかと云ふに、前年吉崎の堂宇が焼失した後、豫て非常に御歸依申してゐた、朝倉敏景が、上人へ此度の御再建は是非共、以前より一層宏大なるものを御建て遊ばす様にと、懇ろにお勧め申した。そこで蓮如上人も敏景が望む通り、宏壯な殿堂を建てたいものであると、文明六年の七月に、其材木を貰ひ集めるため、下

安藝法眼を越前の大野に派出せられた。下間は、大野の郷で朝倉の一族たる經景に會合して、恭を打つた時に、如何した機會か、ツイ口論が始まつた。そこで下間は非常に立腹して、急に藤島の超證寺へ引上げたので、經景も益々憤激して、大野の近邊にある平泉寺とか、豊原寺とかいふ、大地の僧侶共が、豫て蓮如上人に對して、心善からず思ふてゐる事を知つてゐたから、早速之を利用し僧兵を引卒して超證寺へ攻め込で、之を撃破し、勢に乗じて、更らに吉崎の御坊を襲はんとしたから、上人も今度こそは止を得ず、急に吉崎を退去なされねばならぬ様になつたのである。此事に就ても、随分入組んだ事があるが、要するに、下間法眼が、自身の腹立ち紛れに、上人の意に背いて、種々な奸策を廻らしたから、大事を惹起したので、上人は事件が起つて来るまでは、夢にもそんなことは御存じなかつたので、一口に云へば下間の關係から起つたのである。それから、蓮師が急に吉崎を退去なされた原因は、前に述べた經景が吉崎へ攻入らんとした事ではあるが、更に之に加ふるに、下間法眼が富樫之介、政親に對しても、上人の意に反いて獨斷的に事を計らつたから、今までは蓮如上人へ

御歸依申してゐた富樫之介も、憤怒の餘り吉崎へ自ら攻め入らうとした形勢を示したものでらしい。其事は、上人の傳記などにも載つてゐる様であるが、最も歴史的の證據として價值のある、『袖日記』に詳しく記してある。然らば其『袖日記』とは元來如何なる書物であるかと云ふに、富樫政親の姉婿に、松任の城主鍋木兵衛之尉繁常といふものがあつた。處が此繁常は非常な道心家で、文明七年三月の戦争後、吉崎に詣で、上人の弟子となり、法名を德善と稱し、其孫に德丁といふものがあつた。其德丁が何や彼やと聞き集め、昔を偲んで書いたものが即ち此『袖日記』である。其中の一節に

德善申して曰く、吉崎殿には安藝法眼と云ふ者、家司として、上人、物事いゝるわせ給はねば、物事大小となく、法眼が我意に出で、いろく惡しき事どもはんべりき、中にも去る頃、富樫と百姓との爭論に依て、一揆蜂起せしかども、吉崎殿より和議をとり行ひ給は、然るべしとて、越中、加賀の門徒中より申し來りしを、法眼まづ逆様に云ひなし、一揆の方より法眼を大將に望むよし言上す、上人大きに驚かせられ、何ぞ長袖として敵城を攻むるこ

とあらん、自身要崖に據て守るは常の習なれども、ゆめ／＼此義ある可らずと、殊のほか、御機嫌悪し、然るに法眼は、之を又一揆方の注進の者には富樫が所爲、言語道断なり、いそぎ法眼を大將として、富樫をおつ拂うべき旨、上人の仰せなりと、詐り申し、により注進の同行共も、不得心には思へども、是非なく歸りけり、法眼は又上人へ欺謀を以て奉る、御事已に大事に及ぶ上は、それがし上意を以て、一揆の方へ意見すべしと申上る。上人仰せにはかならず／＼合戦の議なる可らず、汝よろしく和を行へとあれば、法眼速かに、加賀に越えて、一揆の大將として、富樫と合戦度々に及ぶ云々斯の如く下間法眼が百姓の一揆と上人との間に立つて、自身の計略を以て、事件が大騒ぎになる様に荒だてた。そこで富樫からして吉崎を攻打に押寄する様な風評が、餘程高くなつたものと見える。その風評を聞いた右の鏑木兵衛之尉繁常即ち徳善は、それこそ吉崎は、大變である油断はならぬと、上人の事をお案じ申して、至急に吉崎御坊へ上人を訪ひ申した。

斯の如く繁常が驚いて吉崎の御坊へ驅けつけた時は、丁度上人が御退去の時で

正に御出船の用意が出来てゐた。そのお伴は赤尾彌七郎、大家一右衛門、慶聞坊の三人であつて、瀬越の亭といふものに小船を吉崎山の背後へ廻させて、七曲といふ處からお船に召され、鹽屋の浦へ竊かにお着になり、其處から若狭國へ航海なされたのである。

處が右の鏑木の尉繁常は、船の出る處へ行たのであるから、之は實に幸ひである、是非お伴の人数に加へて頂きたいとて、お伴をした由を『袖日記』の中に書いてある。

その退去の際といふものは、實に右往左往の大騒動で、話にならぬ有様らしいのであるから普通の者なら、彼の清盛が鎧を裏表に着たといふ様な騒ぎをやる筈である。よし又それ程でないにしても北越布教の根本道場が、一舉で敵手に陥り自からの生命も覺束ないかも知れない折であるから、前後の事を考へる餘裕もなく非常に狼狽へ廻はるに相違ない、とても虚心平氣に、何等の妄想をも起らず、佛の大悲を喜ぶと云ふ事は容易に出来るものではない。然るに蓮如上人は信徒や同行が大騒ぎをやつて、如何なる事であらうと氣遣うてゐるのを、少

しもお氣にかけられず、悠然として平生と異なる處がなかつた。船の中でも吉崎に居られる時と同様に、伴の人々に對して懇ろに法話をなされた。其有様を「袖日記」の中に

國人も別心を存して、吉崎殿を失ひ奉らんと、相企てける巷説區々なれば、萬一不慮の義も出来あらんかと存じ、吉村長藏といふ者、二人召し具して、吉崎殿へ伺候致せしに、はや御出船の用意といひけるまゝ、御船中心元なし、いざ御供奉仕らんと申し、かば、大勢を詮なしとあるまゝ、僕長藏を返しそれがし一人御船中へ參る。頃は八月下旬、夜寒の時分、半夜ばかりに、吉崎を出で、明日着くほどに、若狭の小濱につきにける、これ唯、安藝法橋が強惡より起ると雖、更らに再び、言ひも出だし給はず、船中にも、まめやかに、他力安心のことばりを、御喜びましく、お念佛おこたらせ給はず。小濱より歸るべき由、お暇給はると雖(此間ハミにて文字不明)かたみにとて、六字大幅の名號をなじ賜はる。其記に曰く。
偶獲信心遠慶宿縁

わけ暮れば、信心ひとつに慰めん

佛の恩をふかくおもへば

南無阿彌陀佛

文明七年八月廿八日

六十一歳老衲書之

鏑木兵衛尉入道どのへ

と認めて更らに其奥書に

かへすくも、船中恙なく送り届け申さるゝこと、懇志のほど嬉しくこそはなべれ、やがて弘誓の船へも、かたく送り參らせんするにて候、名殘の言葉つきず候。たゞ南無阿彌陀佛にてならせ給ふべく候。あなかじこゝ。

此の名號の奥書の如きは、上人の實意が滴る様で、今拜讀しても、蓮如上人の前で、尊い御訓誡を蒙つて居る様な感じがする、至誠人を動かすとは實に如斯を云ふのであらう。「やがて弘誓の船へも送りまいらせんするにて候」とわるのは實に尊い言葉であると思ふ。いくら文に長じてゐても、信念がなければ、書くことが出来ないのみならず、斷言することも出来るものでない。さればお互

に何事をなすにも、斯様な心持でやりたいものである。同行が一人送つて来てさへも、懇ろにタシハウする様に法話をしたり、應接もなされたから、衆人の歸向するのは偶然でない。策略的にタシハウさしておくと言ふ様な浮薄な心でなく、心の底から眞實を盡し、親切に取扱はれたから、即ち自ら佛となり、還相廻向の大慈悲者となつて我を忘れて佛の大悲をお勧めになつたから、これまで腐敗と弊害で倒れかけた眞宗を、一代の間に、再興なさることが出来たのである。實に眞宗再興の源因は之に外ならぬと思はれる。此點は新開教に従事する人達や、内地に傳道する人々も、大いに留意せねばならぬことと思ふ、其身の徳が蓮師に及ばないから、直ちに眞宗の興廢を一身で左右するといふ事は、或は出来ないかも知れぬけれども、少なくとも、預つてゐる檀信徒の居る一郷一村に、感化を及ぼすことは出来ぬことでないであらう、して見れば之が取る直さず眞宗の復活であり、活動であるのであるから、大いに社會風教の爲めに盡して、眞俗二諦、佛法世法の教をその所在地に飽まで鼓吹せねばならぬことである。

さて其吉崎御退去の時日に二説あつて、文明七年九月四日の曉であると云ふのが『御一生記』などの説であるが遺徳記には文明七年南呂下旬とある南呂は八月のことなり又『袖日記』の上でも八月下旬としてゐる、今鍋木兵衛尉にお與へになつた、名残の日付を見ると八月二十八日となつてゐるから、吉崎御出船は八月二十五六日頃になる筈である。けれども此兩説は何れが眞實であるか、一寸疑問に屬してゐたが、先年佐藤巖英君が金澤市にゐた時に、同市の大工町の龜田某と云ふ家に、蓮如上人の御文章が三通ほどあつたのを發見した。それに據て見ると『袖日記』の八月下旬の説が事實であることが確められる、實に歴史上、珍重すべき發見であると思ふ。

上人吉崎御退去の後は、例の百姓一揆と富樫氏の争ひは、如何なつたかと云ふと、下間安藝法眼は、蓮如上人から破門の大罰を蒙つたので、狂氣同様になり益々我意を募つて、對抗したから長らくの間、戦争が打續いた。長享二年の戦争の如きは、餘程の激戦であつたが、遂に國守富樫之介政親を越中へ追ひ詰めて自害せしめた、信仰の兵力も亦大きいものと云はねばならぬ。

此富樫氏と一揆との戦争の源因は、前にも述べた通り、専修寺派と本願寺派との争ひといふのである。處が専修寺方の總大將たる、富樫氏が滅亡して仕舞つたので、専修寺の門徒等は他國へ逐ひ拂はれるか、或は本願寺門徒に改むるかせねばならぬ様になつたから加賀一國は本願寺の領になつて仕舞つた。斯ういう譯で、北國の地に本願寺門徒が盛になつて來たのである。嘗に加賀のみならず一揆の百姓共が勢に乗じて、越中へも能登へも、斬り込んで、勝利を占めながら、到る處を本願寺化して、歸依してゐる朝倉氏の國領たる越前は申す迄もなく越中、加賀、能登、も同一信仰の國柄になつて、本願寺の領有の様になつて仕舞つた。

それ等のことが『三州誌』に詳しく載せてある。其一節に

これより高田専修寺の門徒、國々へ逃げ行きて、加州一國は本願寺の分國となつて、一揆どもの進退とぞなりにける。かくて加州の一揆等、國守富樫之介を滅して、其勢に乗じて越中をもさき取り、能登をも攻め伏せけり。斯様な次第で、自から北國に、眞宗の繁昌を來たしたのである。然るに世人が

否智識ある史家其人すら、自己の主義と相容れないからと云ふて、蓮如上人が故意に種々計畫せられて、無智の百姓を煽て、一揆を起さしめ、國守を打滅ぼして、北國を横領し、我意を逞うして俗權を弄したとか云ふけれども、之等は全く事實を知らぬ人々の、何かの爲にする處あつて、事實を捏造して眞宗を攻撃し、佛教を陥れんとしたのに過ぎないものであるから、取り立て、入釜しく云ふ必要はないけれども、往々學校の教科書にまで斯る妄説が載せてあるから、その真相を知らずに、それを眞實とする人も、或は無いとも限らないから茲に特に其妄なることを述べた次第である。

ハ 攝河泉の布教

文明七年八月下旬に、吉崎を退去せられ海路を経て若狭國小濱に着せられ、それから丹波路を越えて、攝州へ出られた。暫らく名鹽といふ處で、布教なされ後ち富田にお移りになつた。富田の教行寺といふ寺は、これが因縁となつて、其後建立せられたものである。それから更らに河内國に移られ、出口といふ處で草庵を拵らへて、暫くの間、其處を根據として、近國を御布教なされた。出

口の光善寺といふのが、即ち其跡である。其事は『金澤別院沿革史』に龜田氏所藏の、文明九年十月二十九日の上人の御消息を引いてある。即ちさんぬる文明七歳。乙未、八月下旬の頃、余、生年六十一にして、越前國坂北の郡細呂木の郷、吉久名の内、吉崎の弊坊を、俄かに便船の序を喜びて、海路遙かに順風を招き、一日がけにと志して、若狭の小濱に船を寄せ、丹波づたいに、攝津國を通り、此當國當所出口草坊に越え、一月二月、一年半と過ぎゆくほどに、何時となく、三年の春秋を送りしことは、昨日今日の如し、此方に於て、居住せしむる、不思議なりし、宿縁淺からざる仔細なり云々

又『遺徳記』にも

文明七年南呂下旬、頽齡六十一にして吉崎の禪室をたち給ひ、順風に帆を擧げ、ひそかに若狭の小濱に船を寄せ、丹波の岨險を通りて、攝津國に出で給ひ、それより河内國茨田郡中振の郷、出口の里といふ處に至り給ひ、幽栖を占給ふこと、已に三年なりき。

それから文明八年の三月に、出口を根據として、紀州へ行化せられた、その時に、喜六太夫といふものがあつて、岩屋觀音の靈告を受けて、上人の弟子となり、法名を了賢と頂戴した。後ち遂に自分の家を改めて寺にして仕舞つた。之が今日の鷲の森の御坊の初めで、其年大和へも行化せられた、飯貝の本善寺が建立せられたのは、此時である。

翌文明九年になつて、和泉の堺へ行化せられ、其處へ又堺別院を建立せられた。斯の如く、吉崎の退去後、文明七年から同九年までの、凡そ三年間は、河内國の出口を本城として、攝津を初めとして紀州、大和、泉州等の諸國を行化せられた當時は畿内諸國に、争亂が打續いて、他の國々までもなか／＼騒がしい有様で、諸國往來の通路も塞がり、神社佛閣の參詣者も稀れであつたが、上人は其間に在つて、兵亂の間を潜りまわり、懇ろに眞宗の安心を説いて、王法爲本仁義爲先の掟を諭して、布教に盡力されたのであつた。戰亂の爲に人心が浮き立つて居るにも拘はらず、足跡の及ぶ處に、必ず坊舎を建立せられた。これで見ても、蓮師の感化が如何に懇切で、人情に適して、當代の人心を如何に善く

感化したか、窺はれる。其時の様子を『御文章』四帖目の第三通目に
それ當時世上のていたらく、いつの頃にか落居すべきとも覺えはんべらざる
風情なり。然る間、諸國往來の通路に至るまでも、たやすからざる時分なれ
ば、佛法世法につけても、千萬迷惑の折節なり。これに依て、或は靈佛靈社
參詣の諸人もなし。これにつけても、人間は老少不定と聞く時は、いそぎい
かなる功德善根をも修し、いかなる菩提涅槃をも願ふべきことなり。然るに
今の世も末法濁亂とは云ひ乍ら、こゝに阿彌陀如來の他力本願は今の時節は
いよゝ不可思議にさかんなり。されば、此廣大の悲願にすがりて在家止住
の輩に於ては、一念の信心をとりて、法性常樂の淨刹の往生せずば、まこと
に以て、寶の山に入りて、手を空くして歸らんに似たるものか、よくよく心
を静めてこれを案すべし云々。

扱て前來述べたる如く蓮如上人は、北國から攝河泉へかけて、到る處に御布教
なされて、處々に、寺を建立なされたが、その方に就ては大いに感服すべきや
り方であると思ふ。苟しくも布教し開教せんと思ふならば、上人の如き道心の

堅固と、熱誠とが必要であることは、今更ら申すまでもないことであるが、然
し乍ら、いくら一時は骨を折つて懸命に布教しても、其感化の温まりがさめな
い様にするとは勿論、倍々信仰を養ひ立て、行くことは最も大切なことであ
る。折角佛法興隆の兆を現はして來ても、之を教養して行く事を怠つたならば、
其大なる感化も遂には立ち消えとなつて仕舞はねばならぬ。然るに蓮如上人は
足跡の及んだ處には必ず寺を建てられたばかりではない自分が他に引移る時に
なると、自分の代理として耻かしくない、信徒に満足を與へて呉れる者を必ず
殘して置れたのである、今日の布教師のように、十日や一週間位、アチヲ、コチ
ヲを飛び廻つて跡とは野となれ山となれといふように、續いて教養をすること
を怠りては、如何なる大徳でも到底感化を遺すことは出来るものではない。
上人は應仁二年に、三河國の布土呂フツロといふ處に、本宗寺を建立なされた。此寺
は後に至つて、上人の孫の實圓といふ人が、兼務せられたのである。後ち文明
六年に加賀越中を教化せられ、本泉寺に於て暫く勸化せられた。其跡も次男の
蓮乘といふ人を住はせて、布教を委任なされた。それから攝州富田の教行寺も

蓮慈といふ人に、其姉の壽尊禪尼を伴はせて、其地方の布教を委任せられた。出口の光善寺も、後に光淳を住職とし、飯貝の本善寺には、實子の實考を据えられた。そうゆう風に、自身が種を蒔いた處には、その種の腐らぬ様に、うまく生長する様に、培養といふことを大切に注意なされて。自身が他に移つても、今までの布教の力が無にならぬ爲に、力められたのみならず、寧ろ盛にせねばならぬと益々盡力なされた。これが、どう考えて見ても蓮師が眞宗といふものを、隆盛にせられた、最も得意な手段であつた様に思はれる。

第四節 山科本山の建立

文明九年の十月、金森の善従が、出口の御坊に參つて申すには、城州宇治郡の山科といふ處は、至極便利な處で、御本廟を建立なさるには、最も適當して居ると思ひますから、是非御本寺の建立を願ひたいものであると、懇々お勧め申した。處が上人が仰せられるには、吾は一處に居住を定めず、有縁の人に法を傳へんが爲に、流浪的生活をやる積りであるからと仰せられたが、善従がた

つてお勧め申すので、上人もそんなら一應見分して見やうと翌年の正月廿九日に出口を發足になつて、山科を見分なされた。然るに其の土地は山科の内の野村といふ處の住人、海老名五郎左衛門の所有であつて、五郎左衛門は豫てから、上人の教化を蒙つた信者であつた處からして、私の此土地に、御本坊を建て、貰うとは、斯んな嬉しいことはない、實に意外な幸福であると、土地の寄進を申出た。そこで蓮如上人も大いに満足なされ、いよいよ本坊を建てることに決定して、先づ小さい茅屋を立て、假住居をなさることになり、其年は江州の近松へ行つて越年せられ、翌十一年の三月に、堺に古い建物があるので、それを運んで来て寢殿に建替えられ、丁度八月になつて、工事が落成した。然る處に、又御影堂を建立するといふことを企てられて、其翌十二年の二月四日に起工し、三月二十八日に上棟式を挙げ、八月になつて愈々竣工した。非常な御満足で、年來の願望を遂げたとお喜になり、其年の報恩講は、十一月廿八日の夜に、永らく大津に御安置してあつた御眞影を、山科の新堂に移し賑々しく御親修になつた。その時は上人初め弟子門徒に至るまで、非常な大喜び、手の舞ひ

足の躍る處を知らぬと云ふ有様であつたが、成程無理からぬとあるといふものは、寛正六年に大谷を退去たらいして以來十六年間といふものは、彼處此處に流浪して、一定の本寺といふものが無かつたのであるが、今度初めて御影堂が落成して、御眞影を御安置申し賑々しく報恩講をお勤になるといふのであるから、其喜の程も想像に餘りあると思はれる。右の御影堂の建立について、諸國門徒の寄附や、材木の買集め等の事は、詳しく「帖外の御文章」に出でゐるが、今は長くなるから略しておこう。又「遺徳記」の中にも、其様子が詳しく載せてあるから就て見られたらよからう。

さて其後、十四年の春になつて、阿彌陀堂即ち本堂の建立を企てられた。二月四日に作事を始め四月二十四日に上棟式を舉行し、六月四日に御本尊を御安置になつた。此時の様子も、亦「帖外の御文章」並に「遺徳記」にも詳しい。これに愈々兩堂が揃うたのである。即ち大谷の焼打以來十八年目である。

十八年の間と云ふものは本堂なしで、御眞影は假住居をなされ、上人は流浪人であつたのである。然るに此假住居と流浪の間に於て、眞宗の再興が出来上つ

たのである。そこで山科兩堂の再建は、堅固な基礎の上に築かれたのである。堅固な基礎の上に築かれたればこそ、四百年來の今日に至るまで、崩も倒れもしない、嗚呼實に堅固なものである、と云へば誤解する人があるかも知れないが、勿論現今の本堂を指して云ふのでない。有形の本堂は山科の後は、更らに京都の堀川に遷つたが、無形の本堂は、今日に至るも決して動かない。若し所謂本堂を建て、教田を擴張せんとするならば蓮師がやられた様な、堅固な基礎の上でない、到底駄目である。そうでないならば、いくら殿堂伽藍は大きくても、砂上の家か、空中の廊廓で、實に危険千萬なものであると思ふ。此點に向つても今の人々が、僧となく、俗となく、大いに注意を拂つて、此間の消息を解して貰ひたいものである。

然るに山科の兩堂は、どのくらゐな大きさで、立派なものであつたらうかと云ふに、本堂は僅かに三間四面、御影堂は五間四面で、今の本願寺の五分の一に足り不足であるから、實に衰れなものであつたと云はねばならぬ。其兩堂が建つた處が、元松林のあつた處であつたと云ふ處から、松林山本願寺と號せら

れた。然し此小さい兩堂が立つたのは、四百年の今日に至るも、未だに變化することのない、大殿堂を立てられた所以である。徒らに威の大を争ふよりも、千古萬古變ることのない、大殿堂を築いて、眞に佛の大悲を勧めたいものである。

丁度此兩堂の立つた時が、前任上人即ち存如上人の二十五年忌に相當したので、これも賑々しく新堂で御親修になつた。其時の上人の御感想は、「帖外の御文章」の中に出てゐるが、實に喜びの涙に咽ばれたといふ有様である。その喜びの涙にひせぶに就ても、祖師の恩徳を思ひ佛の冥加を憶ふて、一層の歡喜をなされた。今其一節を抜けば。

然る間、愚老の本望のがたくもつて、周備満足、何事かこれにしかんや。つらつら事の次第を案するに、當年前任の二十五年に相當つて、阿彌陀堂かくの如く建立せしむること、眞實々々報恩謝徳の懇念も、冥慮に相叶うかとも思ひ、又愚老が連年の志も、忽ちに融通しあへるかと思ひあえり。かたゞもつて佛法の威力、一身の宿縁の至り、不可思議なり、これ然しながら誠に

もつて佛願難思の強縁、稀有最勝の直道にもうあえる徳なり云々。

然るに翌十五年五月廿九日に、上人の長男即ち順如上人が大津で御遷化なされた。これには上人も餘程愁歎なされたらしい。仍て第八子の實如といふ方を立て、嗣法とせられ、蓮如上人は再び住職に就れた。此時上人の化導は、殆んど絶頂に達したといふので、彼の興正寺の先祖である處の、澁谷佛光寺の經豪といふ人が、上人に歸依申し、其他、他宗の名僧知識が多く歸向せられたのも、此時である。然るに上人は、眞宗が盛になるに就て、益布教の側に向けて、綿密なる注意を拂はれ、『御文章』の中の、三條、六條、八條の法制は、皆この盛になつた時に、定められたものである。

八條と云ふは左の如きである。

一 諸國參詣のともがらのなかにをいて、在所をきはらず、いかなる大道大路、又關屋渡の船中にも、さらにそのはかりなく佛法方の次第を顯露に人にかたることしかるべからざる事。

一 在々所々にをいて、當流にさらに沙汰せざる、めづらしき法門を讚嘆し、

をなしく宗義になきおもしろき名目などをつかふ人これおほし、もつてのほかの僻案なり自今已後かたく停止すべきものなり。

一この七日報恩講中においては、一人ものこらず信心未定のともがらは、心中をはいからず改悔懺悔の心をおこして、眞實信心を獲得すべきものなり。もとより我安心のをもむき、いまだ決定せしむる分もなきあひだ、その不審をいたすべきところに、心中につゝみて、ありのまゝに、かたらざるたぐひあるべし、これをせめあひたづぬるところに、ありのまゝに心中をかたらずして當場をいひぬけんとする人のみなり、勿體なき次第なり心中をのこさずかたりて、眞實信心にもとつくべきものなり。

一近年佛法の棟梁たる坊主達、我信心はきはめて不足にて、結句門徒同朋は信心は決定するあひだ、坊主の信心不定のよしをまうせば、もつてのほか腹立せしむる條言語道斷の次第なり、已後にをいては師弟ともに一味の安心に住すべき事。

一坊主分の人、ちかごろは、ことのほか重杯のよし、そのきこえあり、言語

道斷しかるべからざる次第なり、あながちに酒をのむ人を停止せよといふにはあらず、佛法につけ、門徒につけ、重杯なれば、必らずやゝもすれば酔狂のみ出来せしむるあひだ、しかるべからず、さあらんときは、坊主分は停止せられても、まことに興隆佛法ともいひつべき歟、しからずは、一蓋にてもしかるべき歟、これも佛法にこゝろさしのうすきによりてのことなれば、これをとゞまらざる道理歟、ふかく思案あるべきものなり。

一信心決定のひとも、細々に同行に會合のときは、あひたがひに信心の沙汰あらば、これすなはち眞宗繁昌の根元なり。

一此の第八條は眞宗の安心を述べたるものなれば今は略す

普通の者なら、盛になるといふと、少々の反対や抗議は、少しも心にかけないものであるが、上人は其感化が盛になれば盛になるほど、益綿密に注意をなされた。これは誰しも心得ておかねばならぬことで、病は少しく癒ゆると怠りを生じ易く、物は將に出来上がらんとする時に變事が起り易い。盛なる時に已に衰頹の色があるのは、祇園精舎の花の色ばかりではない、羅馬でも希臘でも皆

その通りである。經世の點から云ふても、個人の修養の點から云ふても、常に綿密の注意を怠てはならない何事をするにも大膽にして而も小心でなくてはならぬと思ふ。

延徳元年に至つて、即ち再任職後、丁度四年目に、實如上人に、寺務を譲られて、隠居なされ、信證院と號せられた。此時の事を『山科連署記』に。

延徳元年八月廿八日、先師御隠居あつて、南殿と申すに移らせ給ひて、實如上人へ代を相續せしめ給ひはんべりしなり。其夜、各に對して仰せ言ありしは、功成り名遂げて、身退くは、天の道なり、といへるも、思ひ出でられたり。さればはや世を遁れて、心易く佛法三昧たるべしと、仰せ言ありしとなり。

斯様に隠居せられたれども、樂をする爲めに隠居せられたのではない。佛法三昧に遊ばうといふのである。枕を伴として我儘をやらうといふのではない。唯寺務を、實如上人にお譲りになつたまでのことで、佛法側に就ては、衆生を濟度して、人に信をとらせねばならぬといふことは、益々熱心にお盡しなされた

のである。

第五節 石山の建立

上人は退隱の後七年目、即ち明應五年上人七十二歳の時に大坂の石山に、別院を建立して、隠居所とせられた。如何なる譯で石山に隠居をトせられたかと云ふに反故裏書と云ふ書には左の如く云てある。

抑攝州東成郡生玉の庄内大坂の貴坊草創のことは、去ぬる明應第五の秋、蓮如上人、堺の津へ御出のとき御覽じそめられ、一字御建立、其始より種々の奇瑞不思議等これありとなん、まづ御堂の礎の石も、かねて土中にあつめをきたるが如し、水もなき在所なりしかども、尊師の御教にしたがひ、土をうがちみるに、清水涌出せり、初は一池なりしが、今はいよ／＼心のまゝなり、すでに天王寺聖徳太子未來記の中に末世にいたり、此等の東北にあたり、佛閣建立あるべき由、しるしをきましますと云云、さだめて往昔の宿縁あさからざる因縁、申すもをろかなるものをや。

又上人の御文章にも左の如く云てある。

抑當國攝州東成郡生玉の庄内大坂といふ在所は、往古よりいかなる約束のありけるにや、さんぬる明應第五の秋下旬の頃より、かりそめながらこの在所をみそめしより、すでにかたのごとく一字の坊舎を建立せしめ、當年ははやすでに三年の星霜をへたりき、これすなはち往昔の宿縁あざからざる因縁なりとおぼへはんべりぬ、それについて、この在所に居住せしむる根元は、あながちに一生涯をこゝろやすくすとし、榮花榮耀をこのみ、また花鳥風月にもこゝろをよせず、あはれ天上菩提のためには、信心決定の行者も繁昌せしめ、念佛をもまうさんともがら出來せしむるやうにもあれかしと、おもふ一念のこゝろざしをはこぶばかりなり。

是で見ると、上人が堺へ往かれたるとき石山の邊を通過せられて佛法を弘めるに適當の處と考へられて隱居地に定められたもの、様である。

此の石山に明應七年まで三年間お住居すまひになつて、専心に布教せられたが、日増に信徒も出來て餘程繁昌した然るに七年の四月頃からして、少々御不例であつ

た。其結果、御自身も再び起つことが出來ないと覺悟なされたらしい、頻りに自身の存命中に、信心をとらせたいといふことを、熱心に弟子や信徒に向つて述べられた。御文章にも、其意が見えてある。

愚老、當年の夏ころより遠例せしめて、いまにをいて本復のすがたこれなし、ついに當年寒中には、かならず往生の本懐をとぐべき條、一定とおもひはんべり、あはれく存命のうちには、みなく信心決定あれかしと、朝夕おもひはんべり、まことに宿善まかせとはいひながら、述べられたこゝろしばらくもやむことなし、または、この在所に三年の居住をふる、その甲斐ともおもふべし。

第六章 上人の入寂

上人は明應七年の四月より少々不例でありた。然し老病であるから、そう俄に危篤でもなかつたと見えるが、翌年になると、容態が大分悪るくなつて、二月の十八日に、實如上人は使を以て、蓮如上人を山科に迎へられ、二十日にお着になつたらしい。お病中でありながら、御家族や門徒に對しては、懇切に佛恩を忘れるな、祖恩を忘れるなと、戒められて、自身が一流を再興したのも、佛の冥加を粗略（おろそか）にしなかつたからである、誰しも冥加の程を忘れては相成らぬと、懇ろに誡められた。而して自身にはその往生の近づくのを喜ばれ、庭前の花を眺めては。

さきつゝく花見るたびに猶もまた

いと願はしき西の彼の岸

おいらくのいつまでかくややみなまし

むかへ給へや彌陀の淨土へ

今日までは八十路五つにあまる身の

ひさしく生きしと知れや皆人

など述懐なされた。

三月の七日頃には、モ一餘程様子が變つたと見えて、今世の暇乞に御眞影に拜禮致したいと云ふて、本堂へ輿でお参りになつた。『遺徳記』の中に。

三月七日、今一度御眞影前之詣せんとして、老邁疲腦の身たりながら、病床の衣服をぬぎすて、新裁の衣服を着し給ひて、輿に乗じつゝ、先づ本堂へ詣じ、それより御眞影前へ参り給へり。すなはち先師聖人の尊顔に向ひ給ひて、今生にての拜顔はこれまでなり、必ず彼の國にして、眞形を拜し奉るべし、と、懇ろに云ひける間、聞く人、皆袂をしぼらぬはなかりし。

それから病床に歸つて、辭世の歌を詠まれた。

我死せば如何なる人も皆ともに

雜行すて、彌陀を頼めよ

それから又お子供衆を皆寄せ集められて、懇ろにお遺誠なされた。

吾なきあつとに、兄弟中、思ひ合せて中よかれ、唯一念の信心だに一味ならば
中もよく、聖人の流義も立つべし云々。

と呉れ、御教誡があつた、吉崎で御勘當になつた、安藝法眼もお許しを得て、
涙にくれて喜んだが、遂に廿五日の正午に八十五歳で往生なされ、同じく廿六
日に御葬儀があつた。此等の事は遺徳記に委しく出てあるから御覽なさい。

風恬かに涙靜かなる中、人生の眞境を見、味淡く
聲希なる處、心體の本然を知る。

第七章 上人の家庭

前來、上人の傳記の大略を談したのであるが、今度は上人の家庭は如何なるもの
であつたかと云ふことを、推察して少し談して見やうと思ふ。

抑も、家庭といふものは、その主人が一番の中心になるものであるから、主人
の品性行爲に由つて、その家庭といふものが、たとひ細かい處までは判らない
にしても、大略は推察の出来るものである。が今蓮如上人の家庭と云ふても、
今日までの傳記には、さうゆう項目が別に設けられてゐないから、詳しくは判
らぬけれども、上人が如何なる性格の人であつたか、如何に自分の身をお持ち
になつたか、又家族に對して如何に振舞はれたか、と云ふことを談せば、上人
の家庭の様子は、大抵判ることであると思ふ。

先づ上人は平日いかに心をお持ちになり、又身を如何にお持ちになつたかと云
ふに、佛の慈悲を信受して、萬事佛の大悲にお任せになつたこと即ち他力の信
心を決得して居れたことは申すまでもないが、晝夜不斷、行住坐臥に冥加とい

ふことを、お忘れになつたことがないのである。即ち自身を救済して下さる處の、阿彌陀佛が、晝夜常に自らの周圍を離れずに、擁護してゐて下さるのである。唯自らの身體や行爲のみならず、心の底までも佛が御覽になり居るのであるといふことを、お忘れにならなかつた。そこで朝夕の御飯を召し上るに就ても、一杯の水を飲む時でも、一枚の紙を用ゆる時も、佛の目の前で食ふたり飲んだり、着たりするのである。そうして此衣食住の事、凡てが皆佛からの賜はり物である。言を換えて云ふならば、凡々たる世人を相手にして、總ての事をするといふ考は無かつた、常に絶對大悲の佛を相手にしてゆかれた。『御一代聞書』に

前々住上人仰せられ候、彌陀をたのめる人は、南無阿彌陀佛に身をばまらめられたることなりと、仰せられ候云々、いよく冥加を存すべきの由に候。一心にたのみたてまつる義は、如來のよくしろしめすなり。彌陀のたいしらしめす様に心中をもつべし、冥加おそろしく存すべきことに候との儀に候。朝夕は如來聖人の御用にて候間、冥加のかたを深く存すべき由、おりく前

前住上人仰せられし由に候。

或人申され候と云云、井の水を飲むも、佛法の御用なれば、水の一口も、如來聖人の御用と存候由、申され候。

御膳まいり候時は、御合掌ありて、如來聖人の御用にて、着食うよと申され候。

人は上り上つて落ち場を知らぬなり、只慎みて、不斷そらおそろしきこと、毎事に就て、心を持つべきの由、仰せられ候。

毎事無用なることをし候義、冥加なき由、何時も仰せられ候由に候。

同行同侶の目を耻ぢ、冥慮を忘れず、唯冥見をおそろしく存すべきことなり。

蓮如上人、ものをきこしめし候にも、如來聖人の御恩にてましく候を、御忘れなしと仰せられ候、一口きこしめしても、思召し出され候由、仰せられ候。

御膳を御覽しても、人の食はぬ飯を食うよと、思召し候と仰せられ候。ものを直ぐにきこしめすことなし、唯御恩の尊きことをのみ思召し候と仰せられ

候。

前々住上人は、御門徒の進上物をば、御衣の下にて、御拜み候。又佛物と思召し候へば、御自身の召物までも、御足にあたり候へば、御頂き候。御門徒の進上もの、即ち聖人よりの、御與えと思召し候と仰せられ候。新しき衣裳を、蓮如上人召し候ては、御堂の聖人の御前へ御参り候て、召し物を引出され、御用にて着候と、御申候ていにて候ひつると、宿老衆語物候。斯くの如く、佛の御恩と、冥加と云ふことを、暫らくの間もお忘れなく、行住坐臥、凡ての事を佛の御前でする思になつて、なされたのである。そこで無駄なことは、何に限らず、少しもなさらなかつた。即ち佛から賜はつたもの、聖人から下さつたものであるからして、粗末にしては相成らぬと、贅澤をせぬ様、浪費をせぬ様と、常に慎んで居られた。言を換へて云へば、身を持つては、極々儉約にして、浪費を慎んでおられた。前にも述べた如く、壯年の頃には、非常に貧困な境遇であつたので、書物を見る油は勿論、三度の食事も碌に召上ることが出来なかつたのが、晩年に至ると、以前に違つて、生計が以前に比較

すると、餘程裕かになつたのであるが、而も猶、以前の困難な時と少しも變らずに、總ての事、何によらず、無駄に費すことをなさらなかつた。『御一代聞書』や『實悟記』の中に澤山其様子が記してある。

蓮如上人、いかなる極寒にも、おん手水に、水を御つかひ候、湯をまいらせ候も、冥加なき由、仰せられ候ひき。あまり極寒の折節は、湯を少し御手水の中に流し候らひたる由に候。

蓮如上人の御時は、毎夜座敷中の、油火とうしんを二筋ならでは、かきたてられず。あかりの御用の時には、幾筋もかきたてらる。長さものは三筋かきたてらるゝぞと仰せ候て、二筋より多くはたてられず。佛前にも、當時の様に、大くは御いりなく候ひつると、皆々申候。冥加をおぼしめされたるによりたることなり。

前々住上人仰せられ候。家をつくり候とも、つぶりだに濡れずば、なんともかとも、つくるべし、萬事過分なることを、御嫌ひ候。衣裳等に至るまでも、好き物着んと思ふは、淺間しきことなり、冥加を存じ、唯佛法を心にかけてよ

と仰せられ候。

毎事無用なることを仕候義冥加なき由條々いづれも仰られ候由に候。斯ほどまでに御節儉をせらるゝのみならず、勉強と云ふことも、普通の人とは同日に談すことが出来ない、上人の勉強、即ち學問に就ても布教に就ても、骨を折られたことは、前に述べた傳記の上で、大抵推察の出来ることと思ふ。年が老り隠居せられてからも、なほ布教については非常に勉強せられたのである。『御一代聞書』の中に。

堺の御坊にて前々住上人、夜更て蠟燭をともさせ、名號をあそばされ候、其時仰られ候、御老體にて御手も振ひ御目もかすみ候へども、明日越中へくだり候と申候ほどに、かやうにあそばされ候、辛勞をかへりみられず、あそばされ候と仰られ候、しかれば御門徒のために御身をばすてられ候、人に辛勞をもさせ候はで、たゞ信をとらせたく思召候由被仰候。

と云ふことが出てある、自身が斯く勉強せらるゝから、それで他人が無駄に月日を送ることは、ひどく嫌はれた様である。其事も『聞書』の中にあちこちに見

えてゐるが、今は煩はしいから略するが、斯の如く上人は、常に佛恩を憶ひ、冥加を忘れない様にして、身を持するに、何事も等閑にせらるゝことなく、頗る儉約で、頗る勤勉で、又頗る綿密であつた。

扱又自身の家族に向つても、信念を増長せよ、冥加を忘れるなど、頗る宗教的に子弟の教育をせられた様である。『御一代聞書』に、

我妻子ほど不惑なることなし、それを勸化せぬは淺間敷ことなり。

蓮如上人、再々御兄弟衆等に御足を見せ候。御草鞋の緒くいゝり、きらりと御入候。斯様に京田舎、御自身は御辛勞候て、佛法を仰せられてられ候ひし由仰せられ候と云云。

これは御自身の壯年以來、親しく艱苦を嘗められたことを以て、御子供衆を、御誠めなされたのである。『御一代聞書』に。

文龜三年正月十五日の夜、兼縁夢に曰く、前々住上人、兼縁に御問あつて、仰せられ候様、徒あること、あさましく候えば、稽古かたぐ、せめて一卷の經をも、日に一度みなく寄合して、讀申せと仰せられけり云々。

之は夢の話ではあるけれども、上人が平日から、兼縁と云ふ方に、斯様な事を、お話になりおつたか、即ち勉強と云ふことを常に戒しめられたので、夢にまで浮んだのであらう。其他にも。

幼少なるものは、先づ物を讀めと仰せられ候。又その後は如何に讀とも復せざれば詮あるべからざる由、仰せられ候。ちと物に心もつき候へば、如何にものを讀み、聲をよく讀み知りたるとも、義理を辨へてこそ仰せられ候。その後は如何に文釋を覺えたりとも、信がなくては、徒ら事よと仰せられ候。これも御子供衆に對して、修學の心得を説かれたもの、様である。又『御一代聞書』の中に、

蓮如上人、御廊下を御通り候て、紙片の落ちて候ひつるを、御覽せられ、佛法領のものを、あだにするかやと仰せられ、兩の御手にて、御頂き候と云云。兼縁、堺にて、蓮如上人御存生の時、背摺布を買得ありければ蓮如上人仰られ候、かやうの物は、我方にもあるものを、無用のかいことよと仰られ候、兼縁自物にて、とり申たると答申候に仰られ候、それは我物かと仰られ候、

悉く佛物、如來聖人の御用にもるゝことはあるまじく候。

又『山科連署記』の中に。

先師上人御うしろに腫物いでき侍りし時、顯證寺三位蓮淳に、その膿血のいづるを、のこふべしと仰せありしに、杉原を押たゝみ、すでに拭はんとせしに、仰せられしは、其紙をば、何くより出たるところにて、さやうに潤澤にするぞやと、其時三位、杉原をみつにさき切て拭ひ申さるゝなり、又仰せに、かやうに仰せ候時ばかりにては、いかいあるべきぞ、よろづ心がけが本にてあるぞとよ、かまへて〱佛法の冥加を能々思へとぞ、のたまひけるなり。

是等も御家族に向つて、物を粗末にするな冥加を忘れるなど、注意せられたものである。

御病氣が益々重くなつて、終焉の機が近づいた時に、實如上人、蓮綱、蓮誓、蓮淳、蓮悟等の五人の御子供衆を、枕邊近く御呼びなされて、御遺言なされたことを『山科連署記』には。

十八日の仰せに、かまえて、吾なきわとは、兄弟中思合せて、中よかれ、只一念の信心だに一味ならば、仲もよく、聖人の流義も立つべしと、吳々仰せられ候ひき。

詳しい事は判らぬが、是等に依て見ると、家族の間に向つて、常に宗教的の教訓をなされたことは、明らかなことである。して見ると云ふと、上人の御家庭は、随分澤山なお方々であつたが、洵に麗はしく、少しの風波も立たず、春風の驕蕩なる如く、和氣暖々たるものであつたことは、想像が出来ると思ふ。そこで上人の御子供衆は、皆信仰の篤い、上人の跡を嗣ぐに足るほどの方ばかりで、上人の滅後に於ては、何れも皆、一地方の重鎮となつて、上人の遺言を宣揚せられたのである。

第八章 上人の教會

上人の教會は、一口に言へば頗る平民的であつて、弟子に對しても信徒に對しても、少しも構えた風なく、極めて親切に化導せられたのである。で上人は平生から人に對して、如何かして、信を得させてやりたいと云ふことは、暫らくも御忘れなく、人の顔さへ見れば、彼れが信仰は如何であらう、何とかして信仰を得させてやりたいものであるかと、考えて居られた。『御一代問書』に。

天王寺の土塔會に、前々住上人御覽候て、仰せられ候。あれほどの多き人も、地獄へ落つべしと不惑に思召し候由、仰せられ候。

又道徳といふ人が、正月の年頭に來た時にも、その顔を見るが早いか「道徳は念佛申すか」と、直様信仰の談をせられた。又た弟子や信徒等が歳末の禮に來た時にも「無用の歳末の禮かな、信心をとりて、歳末の禮にせよ」と言はれたことがある。

唯寝ても覺めても、人に信を得させやう、共に佛法を喜ばうといふより外に餘

念がない。時々獨り言を云はれたことが、『御一代聞書』にある。あるとき仰られ候。御門徒の心得をなすときこしめして老の皺をのべ候と仰られ候。

蓮如上人仰せられ候。何たることを聞こしめしても、御心にはゆめく叶はざるなり。一人なりとも人の信をとりたることを聞こしめしたれど、御獨言に仰せられ候。御一生は人に信をとらせたく思召され候由、仰せられ候。蓮如上人御病中に仰せられ候。御自身何事も思召し立ち候事の、なりゆく程のことはあれども、ならずと云ふことなし。人の信なきことばかり悲しく、御慨き思召しの由、仰せられ候。

前々住上人仰られ候、人々の佛法を信して、我によるこばせんと思へり、それはわろし、信をとれば、自身の勝徳なり、さりながら信をとらば、恩にも御うけあるべきと仰られ候、又聞たくもなき事なりとも、まことに信をとるべきならば、きこしめすべき由仰られ候。

人の信なきことを思ふ事は、身をきりさくやうにかなしきよと仰られ候由に

候。

斯の如く、弟子や信徒に對して、誠實である處からして、是非信を得させたいと、常に御心懸て居られるのである。そこで弟子や信徒に對しても、自身の兄弟の如く、朋友の如く、少しも角張つたことなしに、化導なされたのである。これも『御一代聞書』に。

仰せに、身を捨て、各々と同座するおは、聖人の仰せにも、四海の信心の人は、皆兄弟と仰せられたれば、吾もその御言葉の如くなりて、又同座をもしてあらば、不審なることをも問へかし、信をよくとれかしと、願ふばかりなりと、仰せられ候なり。

蓮如上人、順誓に對して仰せられ候。法敬と吾とは兄弟よと仰せられ候。法敬申され候。これは冥加もなき御事と申され候。蓮如上人仰せられ候。信を得つれば、先きに生るゝものは兄、後に生るゝものは弟よ、法敬とは兄弟よと仰せられ候。

佛恩を一同に得れば、信心一致の上は、四方皆兄弟といへり。

佛法の賛歎の時、同行を方々と申すは、平外なり。御方々と申してよき由仰せ言と云云。

前々住上人仰せられ候。御門徒衆を悪しく申すことゆめあるまじきなり。開山は御同行御同朋と御かしづき候に、聊爾に存ずるは、曲事の由仰せられ候。開山聖人の一大事の御客人と申すは、御門徒衆のことなりと仰せられしと云云。

御門徒の上洛候を、遅く申入れ候こと、くせ事と仰せられ候。御門徒を待たせ、遅く對面すること、曲事の由仰せられ候。

斯様な次第で今日の一寺の住職が、門徒を待遇するのとは、大分趣が違つてゐる様である。上人は何とか人の機嫌をとつて、その人に佛法を聞かせやうくとせられて、人が法を聴きに來るのを、うるさがつて、これだけ談したに判らぬか、それだけ聞いて判らぬか、若しそんなら、それは汝がわるいのであるといふ様な、水臭い根性は毛頭無いのであつた。對機の人がなるべく判る様に、成るべく退窟しない様に、どうかして此法を聞かせよう、信を得させようとい

ふ鹽梅式であつた。此事も『御一代聞書』の中に。

蓮如上人、或は人に御酒をも下され、物をも下されて、斯様な事どもありがたく存せさせ、近づけさせられ候て、佛法を御聞かせ候。されば斯様に物を下され候事も、信をとらせらるべき爲と思召せば、報謝と思召し候由、仰せられ候云々。

御門徒衆上洛候へば、前々住上人仰せられ候。寒天には御酒等の酎をよくさせられて、路次の寒さをも忘れられ候様にと仰せられ候。又炎天の時には、酒など冷やせと仰せられ候。

仰せに、吾は人の機を鑑がみ、人に順いて佛法を御聞かせ候由仰せられ候。いかにも人の好きたることなど、申させられ、嬉しやと存候處に、又佛法の事を仰せられ候。いろ／＼御方便にて、人に法を御聞かせ候ひつる由に候。可笑しき事態をもさせられ、佛法に退屈し候もの、心をも、くつろげ、その氣をも失はして、又新しく法を仰せられ候、誠に善巧方便ありがたきことなり。

斯様な有様であるから、上人の教會は、實に麗はしいものであつたらうと、確かに想像せられる次第である。殊に弟子に對しては、時には厳しく訓戒なども加えられて、只可愛がるばかりでなく、一面には嚴重なる鞭撻をせられた。他の一面にはその子の如く愛撫せられた、つまり寛嚴宜しきを得たといふ次第であつた。

そこで弟子の方々も、上人に對しては、一面には父母の如くに親しみ、一面には嚴格なる師匠の如く之を畏敬して、上人の御言葉とあつたならば、如何なるとでも服膺する有様であつた。上人は弟子に對しては恩と威とを以つて、親切に教育せられたのであるが、中にも不心得な者があつて、破門せねばならぬ事情に出遇へば、一旦は思ひ切つて、破門せられるが、然し其者に對しても、平生心に少しも忘れられぬので、何とか彼の心を直して、元の通りに正當の信仰に基かせたいと、始終心にかけられた様である。そこで、其不心得な者が、一旦心得を直してくると非常に喜ばれた、『御一代聞書』に左の如きことが出てある。ある御門徒衆に御尋候、そなたの坊主、心得のなをりたるを、うれしく存す

るかと御尋候へば、申され候、實に心得をなをされ、法義を心にかけられ候、一段ありがたく、うれしく存じ候由、申され候、その時、仰られ候、われはなをうれしく思ふよと仰られ候。

下間安藝法眼蓮宗の如きは、上人に對して非常な迷惑をかけた、大罪人であるが、それでさへも、謝罪して來た時には、お赦しになつて、而もそれに對して満足せられた様子が見える。此事も『御一代聞書』に。

安藝の蓮宗、國を覆えし、曲事に就て、御門徒を離され候。前々住上人御病中に、御寺内へ來り、御説言申候へ共、取次候人なく候ひしその折ふし、前住上人、ふと仰せられ候。安藝を直さうと思ふよと仰せられ候。御兄弟以下、御申には、一度佛法に仇をなし申す人にて候へば、如何と御申候へば、仰せられ候。それぞとよ、あさましきことを云ふぞとよ、心中だに直らば、何たるものなりとも、御漏らしなきことにて候と仰せられ候て、御赦免候ひき。その時御前へまいり、御目にかゝられ候時、感涙疊にうかひ候と云々。宗教家として、信徒に對する態度は、實に斯の通りでなければならぬこと

あらうと思ふ。嘗に宗教家のみならず、世間の教育家、即ち人を育てるといふものにあつては、その弟子に對して、上人の如き誠實心がなくては、到底うま
くゆくものではない。

疾風怒雨、禽鳥も戚々、露日光風、草木も欣々、見
る可し、天地一日も和氣無かるべからず、人心
一日も喜神無かるべからず。

第九章 上人の化風

次に上人の化導の様子、即ち如何に真宗の教義を説かれたか、人を化導するに、
いかなる方法をとられたかといふことを、談じて見たいと思ふが、これは充分
の餘暇があれば、蓮如上人の、「真宗教義に就ての見解」、言を換えて云ふならば、
「上人の教義」といふことから、其他いろ／＼に談を詳しくしたいけれども、時
間もなく、又餘り長くなるから、乍残念、極大要を摘んで談さうと思ふ。
上人の真宗を宣布せられた手段は、一口に云へば口と筆である。前に云ふた如
く本願寺の住職をせられると問もなく、真宗の安心を極めて簡単に、云ひ現は
される様に、『領解文』と、いふものを書かれて、一般の信徒に分られたのである。
その領解文とは、どうゆうものかと云ふと。

もろ／＼の雜行雜修、自力の心をふり捨て、一心に阿彌陀如來、我等が今
度の一大事の後生、御たすけ候へとたのみ申して候、たのむ一念のとき、往
生一定御たすけ治定と存じ、この上の稱名は御恩報謝と存じ喜び申候、この

御ことばり聴聞申しわけ候こと、御開山聖人御出世の御恩、次第相承の善知識のあさからざる御勸化の御恩と、ありがたく存じ候、この上は、定めおかせらるゝ御掟、一期をかぎりまもり可申候。

である。その後は常に真宗の教義を消息文に書いて、信徒に授けられたのである。それを集めたものが真宗の門末に於て、朝夕拜讀する、彼の五帖一部の『御文章』である。御文章は諸君が御承知の如く、極めて真宗の教義を平易に、如何なる愚痴文旨なものにも、判る様に書かれたものである。右は筆の方であるが、口の方は如何であるかと云ふと、これは申すまでもなく、常に信徒の集まつた座席に於ては、法談即ち今日の説教と、法話もなされたのである。唯人の多く集まる時にのみ、法談や法話をなされたばかりでなく、人に遇ふた時には、座敷でも、途中でも、茶を啜るにも酒を飲むにも、必ず信仰の談をせられた。それも前章で述べた如く、退屈させない様に、窮窟な思をさせずに、機を見はからつて、世間はなしの中に、とりませて、面白く、親切に、かたくるしくない様にして、常にお談になつた様である。

然るに其筆で書くのも、口で云ふのも、真宗の教義を、如何なる風に述べられたものであるかと云ふに、少しも、理屈的なことなく、即ち哲學風に、理屈をこねまわす様なやり方でなくて、極めて通俗的に、極めて宗教的に極めて簡單明快に淨土の法門を説かれた。然し乍ら、それも唯出世のことばかりでなく、現世的の方面たる、世間道德の側を、常に懇ろに説かれてある。今一例を挙げると、文明六年二月十七日の『御文章』に。

抑も當流の他力信心の趣をよく聴聞して、決定せしむる人これあらば、その信心のとほりを以て、心底におさめおきて、他宗他人に對して沙汰すべからず、又路次大道、われくの在所ななどにても、あらはに人をもはからず、これを賛歎すべからず、次には守護地頭方にむきても、吾は信心を得たりと云ひて、粗略の義なく、いよく公事を全くすべし、又諸神諸佛菩薩をも、おろそかにすべからず、これ皆南無阿彌陀佛のうちに、こもれるが故なり、ことに外には王法を以て表とし、内心には他力の信心を貯えて、世間の仁義を以て、本とすべし、これすなはち當流に定むる處の、掟の趣なりと心得べ

きものなり。おなかしこく。

いつもこうゆふ風に、出世的の信仰を勸めて、その信仰の上からは、國家に對する處の義務、社會に對する處の道徳を忽せにしてはならぬと、切に教訓せられたのである。『御一代聞書』にも。

王法は額にあてよ、佛法は内心に深くたくわえよとの仰せに候。仁義といふことも、端正なるべき事なる由に候。

又『御文章』に。

國處くにところにあらば、守護地頭に向きては、粗略なく、限りある年貢所當をつぶさに沙汰を致し、其外仁義を以て本とす。

かうゆう教義の説方であるからして、當時の時勢には至極適當したものであつたのである。上に立つものも、皆此教に依て、政治を滑らかに運ぶことが出來、下にゐるものも、人々相互に徳義を守つて、争亂も起らず、亂暴な訴訟沙汰もなくなつて來た。そこで此教義が到處で歓迎せられた。眞宗の再興は管に蓮如上人の艱難辛苦なされたのみならず、上人の教義の説き方がよかつたのである。

つまり機微を見るの明、人情を察するの穎があつたと思はれる。此邊のことも大なる注意を要すること、思ふ。上人の如き親切と熱心と、勉強と忍耐とありて。そうして其教義が當時の人心に最も適することでありて見れば、弘まらずにはおれない道理である。で私は今日の宗教家、特に眞宗の方々には、是非蓮如上人の如き誠實心を持つて貰ひたいと思ふてゐる。此誠實といふことがあると勉強即ち働かすにはおられない、働けば必ず必ず忍耐は出来る忍耐が出來れば必ず勇氣が満々て來る。勇氣が満て來れば、如何なる妨害も物の數でなく、萬難に打克つて行くことが出来るのである。それも説く所の法が時勢に遅れて適せないでは仕方がないから、時勢に適する様に、よく注意せねばならぬ。つまり世間がこうなつた、あうなつたと、それに合してゐる様では、間に合ふ談でないから、是非社會の先導をして行かねばならぬ。

今日では日本の國運は益々發展して、他の各國と對等の交際をして行かねばならぬ國柄となつた。否今日までの白人の跋扈無道を匡正して、東洋の盟主として、堂々と彼等の前に立つて、導くと云ふ見識を供へて、然るべき境遇に立ち

至つたけれども、さて其國民の狀態は如何であるか、智識と氣力と富の力が、うまく揃うてゐるかと云ふに、まだくである、然らば今日に在ては日本國民を導きてそれを名實相應に育てあげて智識の發達、氣力の振起、財力の充實、技術の發展道徳の進歩を圖らねばならぬ、之に就ては是非宗教家に待たねばならぬのである。即ち今日の宗教家なるものは、その重任に當らねばならぬ。そこで如何に宗教を説けばよいか、如何に眞宗の教義を説けば適するであらうか、と大いに熟考してやらないといふと、佛教今日の頹勢を挽回して、蓮如上人の如く再興の光輝を發揚することは覺束ないと云ふてよい。

眞宗の教は、今日までは、多く無常などを説いて、人間を涙もろく、元氣を萎靡さす様になつてゐるが、是が果して眞宗の眞面目であるかと云ふに、決してそうでない、蓮如上人の如きは、表面から眺めると、唯有がたい一方の、優しい人の様に見えるけれども、その内面に包まれたる實質を探つて見ると、上人ほど忍耐力の強い、勉強力の強い、獨立の氣象に富んで、進取の大勇猛心のあつた人は、多く見ないのである。

今日の宗教家、殊に眞宗の僧侶諸君は、上人の内面に持て居られる所の、實質をよく學んで、日本の國民を矢張り上人の如く、誠實心と忍耐力と、獨立進取の氣象のある者に拵えあげねばならぬと思ふ。之に關しては澤山談すべきことがあるが、それは略して、唯一言附け加えたいのは上人が斯くまでに、忍耐、勉強、獨立、進取と、マ、一口に云へば、剛勇な氣の人であり乍ら、表面から見る時には、如何にも優しい、唯難有い一方に見えるのは、何故であるかと考へて見ねばならぬ。それは右に擧げた、所有種類の性質、氣象を、一つの信仰に包んで仕舞はれたからのことである。それで表から見ると、信仰ばかりが見えるが、其實他の徳は信仰の中に包まれてゐるのである。宗教家は如何しても、此通りでないとは本當の成績を擧げることとは六ヶ敷いと思ふ。

第十章 上人の著書

一 正信偈大意 一卷

右は長祿四年金森道西の請によりて著作せられたるものにして親鸞聖人の作なる正信偈を假名交りの文を以て極めて平易に註解せり。

一 御文章 五卷

本願寺派にて御文章と稱し大谷派にて御文と稱す、上人が信徒に與へられたる消息文なり無慮八十通あり之を五帖に分てり故に五帖一部の御文と稱す、編輯者は圓如上人なりと云ふ、名高き白骨の文章は第五帖の中に在り、その文左の如し。

夫人間の浮生なる相をつらく観するに、おほよそはかなきものは、この世の始中終まぼろしのごとくなる一期なり、さればいまだ萬歳の人身をうけたりといふ事をきかず、一生すきやすし、いまにいたりて、たれか百年の形體をたもつべきや、我やさき、人やさき、けふともしらず、あすともしらず

をくれさきだつ人は、もとのしづくさえの露よりもしげしといへり、されば朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり、すでに無常の風きたりぬれば、すなはちふたつのまなこたちまちにとぢ、ひとつのいきながくたゑぬれば、紅顔ひなしく變じて、桃李のよそほひをうしなひぬるときに、六親眷屬あつまりて、なげきかなしめども、更にその甲斐あるべからず、さてしもあるべき事ならねばとて、野外にをくりて夜半のけふりとなしはてぬれば、ただ白骨のみぞのこれり、あはれといふも中々をろかなり、されば人間のはかなき事は、老少不定のさだめなれば、たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて、阿彌陀佛をふかくたのみまいらせて、念佛まうすべきものなり、あなかしこ。

一 帖外御文章 六卷

右は前の五帖御文章に洩れたるものを集めたるなり、此中には眞偽未決のものもありと云ふ。

一 御俗姓消息 一通

蓮如上人

祖師親鸞聖人の正忌に垂示せられたる教訓文なり。

一 夏御文章 四通

夏中即ち安居に當て垂示せられたる教誠文なり。

一 領解文 一通

前の「上人の化風」の下に出せるものは是なり、此文を改悔文とも稱す。

一一 宗意得之事

簡短なる教訓的のもの八條あり、蓮如上人の作なるべしと古人も評し置けり。上人の著作としては右に擧たる位に過ぎず、然るに後人の作にして上人に關係あるもの數部あり左に掲ぐべし。

一 蓮如上人御一代聞書 二卷

是は蓮如上人の言行録とでも謂ふべきものなり、中には實如上人等の語もあり、余は私に之を真宗の論語と稱し常に座右に備へて、論語と共に平生の修養に資せり、前の諸章の中にも時々之を引用したりしが今又修養に資すべきもの兩三則を左に録出せん。

一 我が心にまかせずして、心を責よ、佛法は心のつまる物かとおもへば、信心に御なぐさみ候と仰られ候。

一 一度のちかひが、一期のながひなり、一度のたしなみが一期のたしなみなり、そのゆへはそのまゝのちをばれば一期のちかひになるによりてなり。

一 蓮如上人仰られ候、一向にわろき人は、ちかひなどいふ事もなし、たゞわろきまでなり、わろしとも仰こともなきなり、法義をもこゝろにかけちとこゝろゑもある上のちかひが、ことの外の違ひなりと仰られ候由に候。

一人のこゝろえのとほり、申されけるに、我こゝろは、たゞかごに水を入候やうに、佛法の御座敷にては、ありがたくも、たふとくも存候か、やがてもとの心中になされ候と、申され候所に、前々住上人仰られ候、そのかごを水につけよ、我之をば法にひてゝをくべきよし仰られ候由に候、萬事信なきによりてわろきなり、善知識のわろきと仰らるゝは信のなきことを、くせことゝ仰られ候事に候。

一 我ばかりと思ひ、獨覺心なること、あさましきことなり、信あらば、佛の

慈悲をうけと申す上は、我ばかりと思ふことは、あるまじく候、觸光柔
輒の願候ときは、心もやはらぐべきことなり、されば縁覺は獨覺のさとり
なるがゆへに、佛にならざるなり。

一 蓮如上人仰られ候、當流には總體世間機わろし、佛法のうへより何事もあ
ひはたらくべきことなるよし仰られ候と云云。

一同仰られ候、世間にて時宜しかるべきは、よき人なりといへども信なくば
心ををくべきなり、便にもならぬなり、假令片目つぶれ、腰をひき候やう
なるものなりとも、信心あらん人をば、たのもしく思ふべきなりと仰られ
候。

一 佛法のうへには、毎事に付て、空おそろしき事と存候べく候、たゞよろづ
に付て、油斷あるまじき事と存候への由折々仰られ候。

一時節到來といふこと、用心をして、その上に事の出来候を時節到来とはい
ふべし無用心にて出来候を時節到来とは、いはぬことなり。

一 前々住上人、法敬に對して仰られ候、まきたてといふもの知たるかと、法

敬御返事に、まきたてと申すは、一度たねをまきて、手をさゝぬものに候
と申され候、仰にいはく、それぞ、まきたてわろきなり、人になをされま
じきと思ふことゝろなり、心中をば申出して、人になをされ候はでは、心得
のなをること、あるべからず、まきたてにては、信をとること、あるべか
らずと仰られ候。

一 何ともして、人になをされ候やうに、心中を持べし、我心中をば、同行の
中へ、うち出してをくべし、下としたる人のいふことをば、用ひずして必
ず腹立するなり、あさましきことなり、たゞ人になをさるゝやうに、心中
を持べき義に候。

一 たとひなき事なりとも人申候は、當座領掌すべし、當座に詞を返せば、
ふたゝびいはざるなり、人のいふ事をば、たゞふかく用心すべきなり、是
に付て、ある人あひたがひにあしき事を申すべしと契約候し處に、すなは
ち一人のあしきさまなること、申しければ、我は左様に存せざれども、人
の申す間、左様に候と申す、されば此返答あしきとの事に候、さなきこと

なりとも、當座は、さぞと申すべき事なり。

一 聖教をすきこしらへもちたる人の子孫には、佛法者いであるものなり、一たび佛法をたしなみさふらふ人はおほやうなれども、おどろきやすきなり。

一 願誓申されしと云々常には我前にてはいはずして、後言いふとて、腹立するなり、我はさやうには存せず候、我前にて申にくはば、かげにてなりとも、我わろき事を申されよ、聞て心中をなすべき由、申され候。

一 蓮如上人仰られ候、佛法には、まいらせ心わろし、是をして御心に叶はんと思ふ心なり、佛法のうへは、何事も報謝と存すべきなり。

一 くちと、身のはたらきとは、似ざるものなり、心根がよくなりたきものなり、涯分心の方を嗜み申すべきことなり。

一 行さき、むかひばかりみて、あしもとをみねば、ふみかふるべきなり、人のうへばかりみて、わが身のうへのことを、たしなますは一大事たるべきと仰せられ候。

右の外に未だ面白き教訓數多あり、今一一録出するの違がないから本書に就て

御覽なさん。

一 山科連署記 二卷

是も前の御一代聞書と同様のものなり、蓮如上人を研究せんとするには御一代聞書と此書とは是非参考すべきものなり御一代聞書の編輯者詳に知れず、此書は明應八年三月慶聞、圓誓、了珍、空善、慶慈等八人が相共に記録せしものなりと云ふ。

一同 附録 一卷

是は空善日記とも云ふ、前の山科連署記と重複の事多し。

一 蓮如上人遺徳記 一卷

是は蓮如上人の傳記なり大永四年八月兼縁蓮悟の二人が集めて實悟が記録せしものと云ふ、此の外實悟記一卷反故裏書一卷あり、此等の書の中にも蓮如上人に關する記事あり蓮如上人の研究には必要の書なり。

一 蓮如上人御物語 一卷

是は記者詳ならず天正八年九月清書とあり、此中の法語は多くは御一代聞書

の中に在るものと同じ。

一 實悟記拾遺 二卷

是も前の物語と同類なり。

一 蓮如上人御一生記 六卷

作者詳ならず、享保元年十一月の刊行本あり上人の傳記なり。

一同 傳起 五卷

是は寶曆九年象山先啓の作なり。

一 眞宗懷古鈔 三卷

是は明和四年河内の慧忍の作なり、蓮如上人が吉崎、出口、堺、山科、大坂の五坊建立の事を記す。

但しその本據を標せずと云ふ余は未だ見ず。

右の外蓮如上人の傳記録は説教風の怪し物數種あり。

蓮如上人了

明治三十九年五月十三日印刷
明治三十九年五月十九日發行

定價金三十八錢

著者 前田 慧 雲

發行者 山中孝之助

東京市京橋區築地二丁目卅番地

印刷者 河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目廿番地

印刷所 國光社

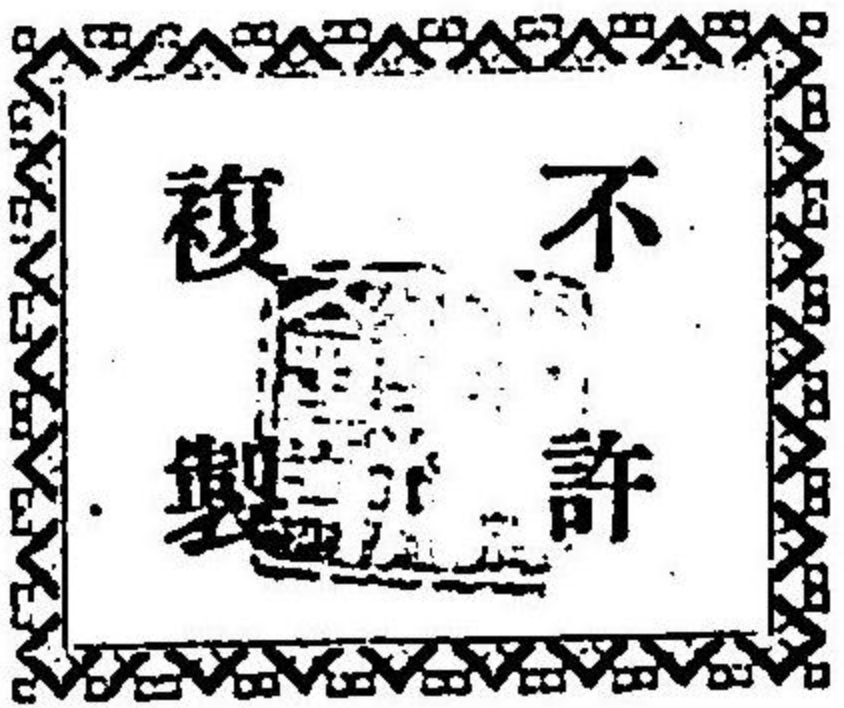
東京市京橋區築地二丁目廿一番地

發行發賣所 井洲堂 山中孝之助

東京市京橋區築地二丁目卅番地

關西賣捌所 積文社

大阪市東區本町四丁目



上宮教會藏版

全 國 賣 捌 書 肆

東京神田神保町	東 京 堂	大阪北久太郎町	柳原書院	淡路州本	福浦文藏	常陸石岡	高木市兵衛
同 神田小川町	大野書店	京都二條木屋町	具葉書院	長崎酒屋町	安中半三郎	下野宇都宮	内田書店
同 同 小川町	金昌堂支店	同 寺町通	若林茂一	同 引地町	集 英 堂	奈良橋本町	木原文通堂
同 本郷一丁目	勉 強 堂	同 同	松田庄助	同 勝山町	松崎和市	大和帶解	木原本店
同 春水町二	東 亞 堂	丹波福知山	文 進 堂	佐世保市	五其川書店	同 郡山	宮津書店
同 京橋弓町	森江分店	横濱松ヶ枝町	南波庄兵衛	肥前大村	藤月朝六	同 八木	武村寅吉
同 同	松邑孫吉	伊勢崎町	弘 集 堂	新潟古町通	萬松堂支店	同 高田	中川書店
同 同	北 隆 館	同 同	弘 文 堂	同 同	北 光 社	同 五條	武村寅吉
同 同	春 祥 堂	同 同	倉 田 屋	越後水原	萬松堂本店	伊勢津市	萬 善 堂
同 同	新 橋 堂	同 同	勉 強 堂	同 地蔵堂	江口藤吉	同 同	豐佳書店
同 同	目 黒 書 店	同 吉田町	第一有隣堂	同 長岡	目黒十郎	伊勢四日市	岩田書店
同 同	森江書店	同 同	第二有隣堂	同 同	覺 張 治 平	同 同	伊東書店
同 同	同 同	同 同	百岡平助支店	同 三條	樋口書店	名古屋本町	川瀬代助
同 同	同 同	同 同	久 榮 堂	同 柏崎	高 桑 書 店	同 宮町	伊東書店
同 同	同 同	同 同	日 進 堂	同 高田	高 橋 恒 同	同 玉屋町	川瀬代助
同 同	同 同	同 同	木村治作	同 同	室 直 書 店	同 同	永東書店
同 同	同 同	同 同	福 井 宗 吉	同 直江津	西 澤 支 店	同 同	三輪伊六
同 同	同 同	同 同	阪 田 文 盛 堂	上毛前橋	煥 平 堂	同 門前町	三輪文次郎
同 同	同 同	同 同	竹内伊八郎	同 高崎	文 心 堂	同 同	一 頁 堂
同 同	同 同	同 同	石田松造	同 富岡	水 田 書 店	三河豊橋	其 中 堂
同 同	同 同	同 同	柳田直藏	下越千葉	多 田 屋 支 店	同 同	淺見証太郎
同 同	同 同	同 同	中井正吉	常陸水戸	川 又 銀 藏	遠州濱松	高須廣治
同 同	同 同	同 同	小山富之助	同 土浦	伊 沼 彌 助	駿河静岡	富田書店
同 同	同 同	同 同	同 同	同 同	同 同	同 同	吉見義次

全 國 賣 捌 書 肆

甲府柳町	柳 正 堂	福井市	中村書店	長門長府	池田茂助	豊前中津	梅津壽平
同 大津後在家町	古 川 書 店	富山市	宇都宮源平	同 萩町	含 英 書 院	同 四日市	中 國 角 兵 衛
同 同 中京町	文 泉 堂 支 店	高岡市	中 田 清 兵 衛	同 下關	上 山 松 藏	豊後大分	甲 斐 治 平
同 近江彦根	廣 田 七 次 郎	伯耆米子	學 海 堂	同 同	重 野 集 文 堂	同 竹田町	高 野 菊 三 郎
同 同 長濱	文 泉 堂	出雲松江	今 井 兼 文	紀伊和歌山市	宮 井 宗 兵 衛	肥前佐賀市	河 内 壯 助
同 同	中 村 藤 平	同 同	川 岡 清 助	阿波徳島市	黒 崎 精 二	同 同	平 井 平 治
同 同	郁 文 堂	同 同	有 田 傳 助	同 同	井 岡 文 榮 堂	同 同	大 坪 萬 六
同 同	三 浦 香 店	同 同	板 倉 理 四 郎	阿波臨町	弘 文 堂	肥前唐津	牧 川 徳 次 郎
同 同	岡 安 慶 助	石見濱田	安 達 共 榮 堂	設 高 松 市	宮 崎 開 益 堂	熊本市	長 崎 次 郎
同 同	四 澤 香 店	同 同	武 内 彌 三 郎	同 同	龜 友 堂	日向宮崎	松 井 義 雄
同 同	日 新 堂	同 同	奥 田 金 正 堂	丸 龜 市	開 文 會	同 延 岡	谷 村 幸 兵 衛
同 同	高 見 香 店	同 同	細 藤 合	伊 豫 松 山 市	向 井 康 次 郎	鹿兒島市中町	谷 村 幸 兵 衛
同 同	水 琴 堂	同 同	博 文 堂	同 同	土 肥 興 平	同 同	久 永 金 光 堂
同 同	藤 崎 香 店	同 同	吉 田 朔 七	同 同	末 政 久 次 郎	同 同	谷 村 幸 兵 衛
同 同	有 千 閣	備前笠岡	五 竹 園 書 店	同 大洲	双 松 堂	同 東 千 石 町	篠 原 書 店
同 同	同 同	同 同	北 辰 舍	同 同	足 立 常 吉	函 館 末 廣 町	魁 文 會
同 同	同 同	同 同	龜 山 新 助	同 宇和島	石 崎 忠 八	同 同	二 二 堂
同 同	同 同	同 同	大 成 堂	土佐高知市	澤 本 駒 吉	札幌區南一條	富 貴 堂
同 同	同 同	同 同	崇 香 堂	筑前福岡市博多	積 善 館 支 店	小樽堺町	白 鳥 書 店
同 同	同 同	同 同	白 銀 本 店	同 同	博 文 社	同 入舟町	川 南 書 店
同 同	同 同	同 同	明 文 堂	同 同	高 田 書 店	後志御鉢内町	池 田 書 店
同 同	同 同	同 同	白 銀 支 店	筑後久留米市	菊 竹 香 店	石狩旭川町	村 上 書 店
同 同	同 同	同 同	小 原 松 千 代	同 同	田 中 幸 次 郎	廣 島	積 善 館
同 同	同 同	同 同	中原卯兵衛	豊前津津	佐 野 長 七	同 同	友 田 書 店

アーサー、ロイド先生序
忽滑谷快天先生著

怪傑マホメツト

全一冊挿書 定價金五十錢 郵税金八錢

序論にはアラビヤの奇風異俗抱腹絶倒すべき者詩趣津々たる者枚舉に遑わらず本論には宗教家としてのマホメット迫害凌辱の中に隠忍黙耐する預言者的高風を叙し更に將軍として渠が千里の馬に跨り屍山血海を踏破する雄姿を描き進んで渠が政治家としての怪腕鬼術を述べ最後に渠が個人として起居動靜の瑣事より閨門の秘事に至るまで悉く詳記して裸々赤條々たる眞面目を現はす我國空前の大著なり。

ペークマン氏原著
杉村縦横氏譯補

改訂 強肺術

全一冊 定價金四十錢
郵税金四錢

肺病を恐るゝものは讀め、肺病に罹れるものは讀め、歐米に於ける最新式の體力養成法を讀め、此書に六の特色あり

- 第一、時間を要せざることを。
 - 第二、費用を要せざることを。
 - 第三、場所を要せざることを。
 - 第四、勞力を要せざることを。
 - 第五、言文一致なることを。
 - 第六、總ふり假名付なることを。
- 故に男子は勿論、婦人小兒と雖も、容易に理解し、容易に實行し、而して確實に其効果を收め得べし。

醇庵 鈴木券太郎先生著

犯罪論及女性犯人

●菊判全一冊總クロス美本●紙數五百五十
●定價金一圓五十錢郵税金拾五錢

●菊判全一冊總クロス美本●紙數五百五十
●定價金一圓五十錢郵税金拾五錢
犯罪とは何物か犯人とは何者か女性とは何物か女性犯人とは何物か本書は此等問題に答へんが爲めに犯罪生理學、犯罪心理學、犯罪社會學の見地に據り罪罰の根本哲學を開立し世の法曹家の犯罪及犯人定議に一大動搖を與へ女性犯人に就ては其解剖的及生理的特狀を詳説し其人相、毛髮、乳房、生殖器、音聲、筆跡、感覺、色慾、文身の如き亦之を遺傳の法に商量し或は模範の理に依證し先天的犯罪者情熱犯者其他の分類下に於ては各其特質を列舉し我國最近の犯罪事件を具體的に參考し以て理實配合の巧を空め造化の微を闡き人情の細に入り女性の秘器を暴露し其罪惡を検案する處觀察犀利思想超凡洵に是れ科學の精華文學の上乗たり而して考證は則廣く百家に出入し論斷は則浮薄を避け一言一句悉く根柢あり、犯罪學の一大體統、新刑法學派の一大柱礎、理想深遠風神崇高の一大文章此書を指して現世紀の一大產物、思想界の一大革命と云はずんば將た何物をか指さん實に破天荒の奇書也

新公論社編 ○附錄學生消夏法

男女學生氣質

全一冊 定價金一廿錢
郵税金二錢

該書は坪内雄藏、棚橋絢子、幸田露伴、村上專精、三輪田眞佐子、佐治實然、山脇ふさ子、奥村五百子、鳩山春子、本田庸一、南條文雄、小杉天外、山縣悌三郎、前田慧雲、井上圓了、島田三郎、松村介石、磯部彌一郎、戸川殘花、鈴木券太郎、石黒忠應、暹塚麗水、中川謙次郎、南岩倉具威、棚橋一郎、寺田勇吉、ノオスター、坂本盛徳、加納久宣、古川流泉、田中治六、加藤咄堂、境野黃津、中島徳藏、下田次郎等の大家が、現代男女學生の長短兩方面を觀察し、その長所を助け、その短所を補ふべき方法を示されたるものなり。

新佛教徒同志會編纂

來世之有無

全一冊
定價金二十錢
郵税金四錢

現代の名士二百餘家が來世の有無につきて回答せられたるものにして實に之れ空前の珍品なり
「加藤弘之、佐治實然、志賀重昂、井上哲二郎、木下尚江、幸田露伴、前田慧雲、渡邊國武、建部遜吾、井上圓了、島田三郎、南條文雄、村上專精、谷本富三、島中洲、三輪田眞佐子、湯本武比古、戸水寛人、海老名彈正、平井金三、中島力造の諸君外九十餘大家」

曹洞宗管長 森田悟由禪師序
加藤咄堂 峰 玄光 共著

禪觀錄

全一冊
定價金三十錢
郵税金四錢

禪とは何ぞや曰く言ひ難し本書は言ひ難きの禪を説き盡して餘蘊なく更に發して武士道の根底となり疑つて文學技藝の精華となれる事蹟を描寫し逸話あり漫筆あり神韻縹緲一讀巻を擱く能はざらむ。

文學博士前田 慧雲先生著

修養と研究

全一冊
定價金四拾錢
郵税金六錢

博覽高識教鞭を帝國大學に執りて幽を闡き微を穿ち温厚篤實感化を東都の青年に垂れて一世の模範となれるは前田先生なり本書は先生が多年の研鑽になれる佛教教理上の大論文と修養に關する深厚なる談話とを編輯したるものなれば一度本書を繙かんか親しく先生に接して指導を受くるの感あるべし。

理學士 石川成章先生著

宇宙の默示

全一冊
定價七拾錢
郵税金八錢

石川先生は我が國有数の科學者たると共に又熱烈なる宗教信者たり、宗教眼を以て自然を觀察し、科學眼を以て宗教を評論す、天に閃く星辰も、地を彩る山川も、皆な之れ自然の妙音たり、宇宙の默示たるなからひや、先生流麗の筆を以て之れを寫し、時に人生の情熱を論じ、自然の光線を説明し、時に水火の作用を説いて、人心の煩悶を寫し、時に自然美を示し、時に地球の生命を論ずる所何人か美妙に渴仰し、其秘密に隨喜せざらむ、苟くも宇宙人生に疑を抱くの徒、希くは本書の妙音によつて大悟する所あれ。

加藤咄堂先生著

應用修辭學

全一冊近刊

文名噴々江湖に知られたる加藤咄堂先生は又我が國屈指の雄辨家なり、本書は先生が多年の經驗と修辭の原則により、演說并に作文に關する原理を説述して其應用を示し、言語の組立、音聲の抑揚、文章の組織、推敲の工夫に至るまで叮嚀反覆に之れを説明し、古今東西の文話并に演說家の經驗談を加へ、實益に兼ねるに趣味を以てしたる近來稀に見るの好修辭學たり。

384
3

黒岩周六先生講演

人生問題

全一冊
定價金五十五錢
郵税金八錢

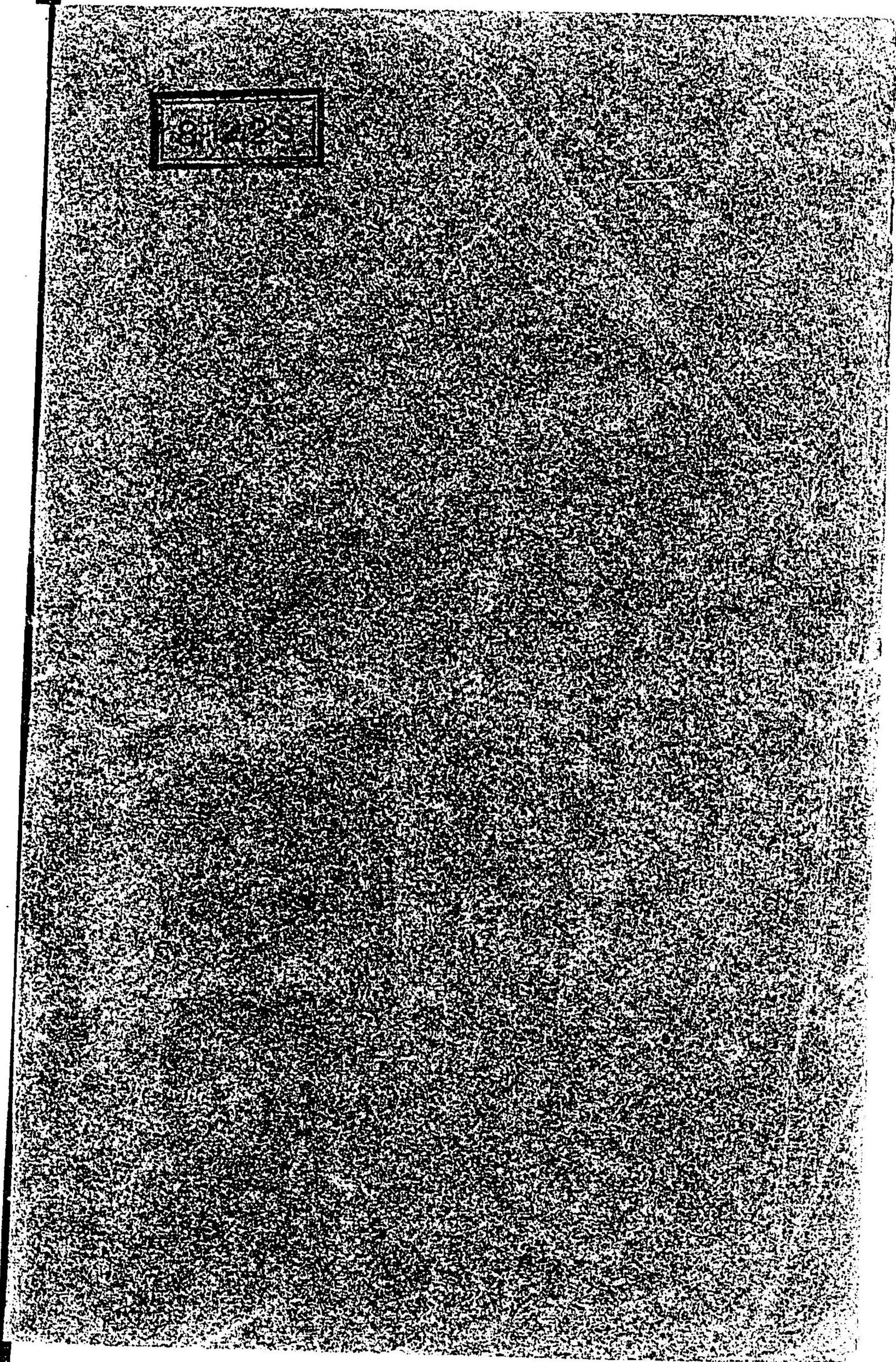
人生とは何ぞや、是れ千古の疑問なり、哲人之を説き、碩學之を論じて、而して懷疑の雲益密に、苦悶の人愈々多からしむす、然るに現代思想界の泰斗、黒岩先生、自ら人生問題に逢着して、疑問の源泉を探し、大に其の眞趣を得て、茲に此書あり、叙する所、神の有無に始まり、人生の悲觀樂觀に終る、眞に天籟の妙音なり、世の悶ある人、疑ある人、速に來つて此福音に接せよ、庶幾くは、平穩と満足と活力とを得て、温く且つ光ある人生に觸着することを得ん。

文學博士 前田慈雲先生著

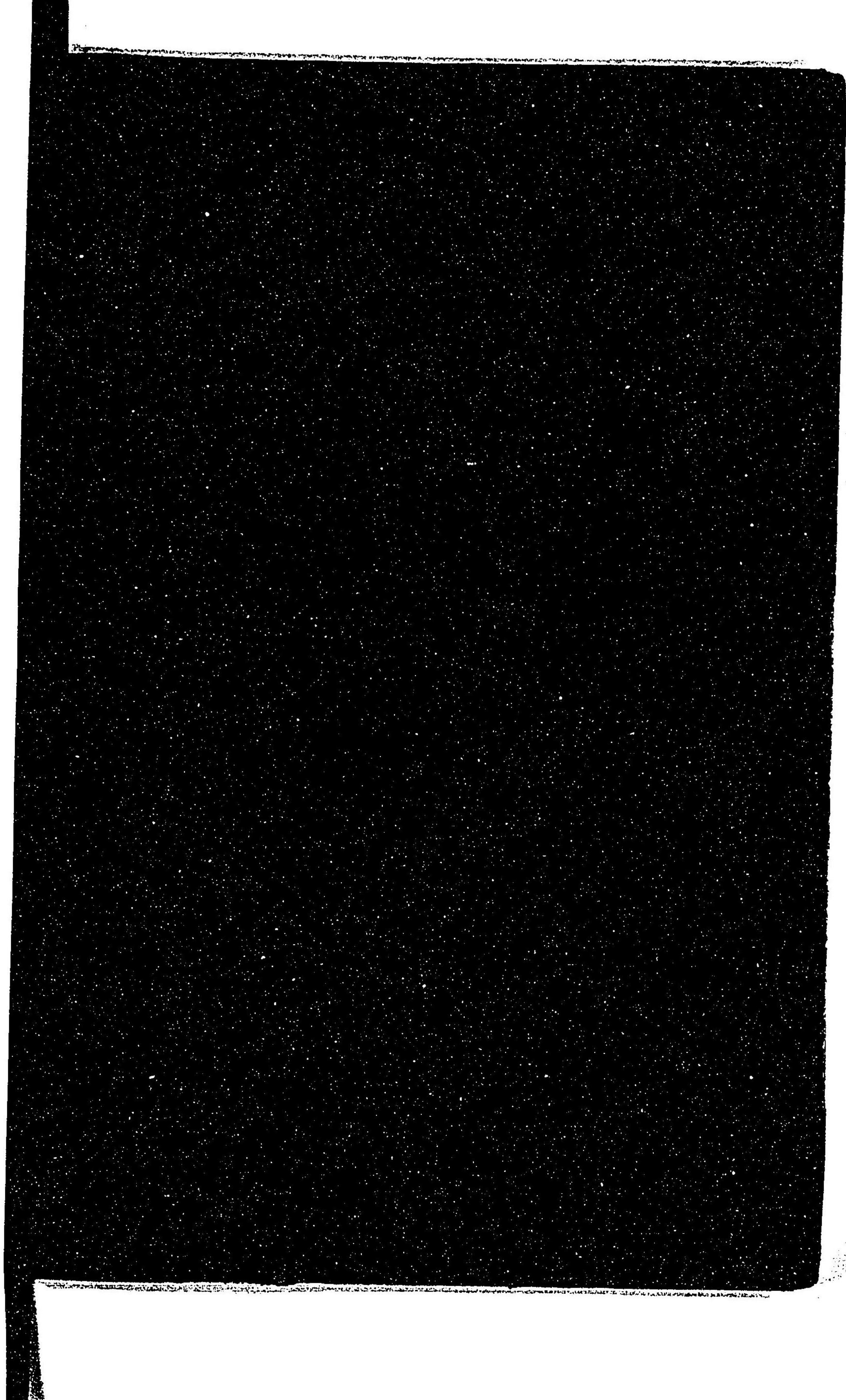
蓮如上人

全一冊
定價金三十八錢
郵税金六錢

佛教界に、最も多くの特色異彩を放ちつゝある、純他力教眞宗の大成者たる蓮如上人に就て、前田博士が、該博の學識と、燃犀の史眼とを以て、上人の時代、性格、教義、信仰、事業、感化等のあらゆる方面に涉り、微に入り、細を穿ちて、評傳せられたるものにして、上人の眞面目は、歴々として讀者の眼前に活躍し、純他力教の眞髓は、一讀の上に了解せらるべし。



324
3



324
3

019258-000-9

324-3

蓮如上人

前田 慧雲/著

M39.5

ABF-2856



